



追 悼

山岳遭難者

- 岩本尹也さん（穂高岳吊り尾根で遭難）…………… 山田和彦
伊藤国啓さん（穂高岳吊り尾根で遭難）…………… 葛西正美
新人合宿と岩本、伊藤両先輩の思い出…………… 主計勤也
山形文武さん（劔岳池ノ谷ドーム稜にて遭難）
…………… 駒井浩、小川 勝
佐藤正敏さん（アンナプルナⅡ峰、7,300M 付近で遭難）
…………… 故 佐藤マツヨさん、武藤一郎、井関芳郎
片岡 格さん（富士山つばくろ沢で遭難）
…………… 西郡光昭、秋元恭浩、牧 晃一
福島 渉さん（グランドジョラスで遭難）
…………… 小根田一郎、牧瀬敏裕、中田 茂、師田信人、井関芳郎
服部 崇さん、小滝顕也さん（桧尾岳桧尾尾根で遭難）
…………… 故 山田哲雄先生、浦山大介、植垣健太郎
二俣勇司さん（カラコルム、クラウン峰にて遭難）… 師田信人
御子柴三男さん（アイサワ谷で遭難）
…………… 草野徳光、小根田一郎、扇能 清

病没・事故者

- 樋口清明さん（27 年度入部）…………… 岡田 要
小林喜芳さん（29 年度入部）…………… 中村和夫
水野久人さん（32 年度入部）…………… 小原 武
窪田文夫さん（32 年度入部）…………… 松尾武久
斉田坦男さん（33 年度入部）…………… 山田和彦
小川永行さん（35 年度入部）…………… 奥嶋啓志
幸田友三さん（37 年度入部）…………… 駒井 浩
福原正昭さん（38 年度入部）…………… 松尾武久、宇都宮昭義
牧 晃一さん（39 年度入部）…………… 寺田雅治、武藤一郎

報告 No.2 完成を前に急死

- 小川 勝さん（37 年度入部）
…………… 西郡光昭、扇能 清、井関芳郎、米倉幸夫、西阪 孚

古い顔

心を知った友達は 兄弟よりも懐かしい

同じ家に何故君は 生まれてきてはくれなんだ

そうすりゃ今でも傍にいて

失った友 去った友 奪われた友

いろいろと 昔のことなど語ろうに

あーあー懐かしい古い顔

子供の頃に遊んだり 学生時代につきあった

いろんな友もいたけれど みんなみんな今は無い

あーあー懐かしい古い顔

夜遅くまで座り込み 一緒に語ったものだった

あの仲良しの飲み仲間 みんなみんな今は無い

あーあー懐かしい古い顔

恋もしたしっけ素晴らしい 美人だったあの人は

今では会えない人の妻 みんなみんな今は無い

あーあー懐かしい古い顔

あーあー懐かしい古い顔

山岳遭難者

岩本尹也さんを偲ぶ

昭和36年4月13日、穂高岳吊り尾根で遭難

山田和彦

岩本さんは私の1年先輩ですが、温厚で無口で物静かな方でした。小さな体が隠れるほど大きなザックを背負って黙々と歩いていた姿が目には浮かびます。

3月の常念～槍ヶ岳の合宿では、岩本さんと二人で槍をアタックしましたが、東鎌尾根のラッセルに時間をくいと、夕暮れにブルーアイスに覆われた槍の穂を登って、その夜は肩の小屋でローソクの灯で氷を溶かしてわずかなピンチフードを食べ、膝をかかえてふるえながら寒い夜を過ごしました。次の日は、槍沢を下り水越乗越に登り、疲れた体にムチ打ってやっとなのおもいで大天井のテントに帰りつきましたが、あのときも終始冷静で、本当に頼れる先輩でした。そんな岩本さんが吊り尾根から滑落するとは！ いまだに理解できません。岩本さんと同期で大変仲のよかった格さんも富士山で亡くなりました。今頃、二人は天国で何を話しているのでしょうか。



●白出の科尔で、縦走隊と奥穂サポート隊、この後、遭難があった。後列左が故岩本尹也さん、前列右が伊藤国啓さん。

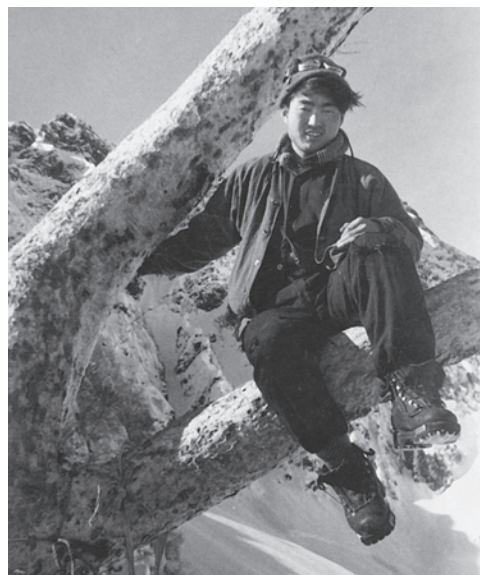
伊藤国啓（クニヒロ・コッケイ）さんの思い出

昭和36年4月13日、穂高岳吊り尾根で遭難

葛西正美

私は昭和34年の春、文理の講堂で行われたサークルガイダンスで小林喜芳さんの「志ある者は来たれ」との格調高い一声に痺れて、松本山岳部に入った。

山岳部には6名の2年部員がいたが、8名の新人部員は、伊藤国啓さんと山田和彦さんからパッキング、



●奥又白池 宝ノ木の上で

テントワーク、岩登りから飯の炊き方に至るまで指導を受けた。

伊藤国啓さんは、文理学部化学科の2年生で、新潟県津川出身だった。通常はコッケイさんと呼ばれており、気は優しく力持ち、金太郎さんを地でいくような人で、本人曰く「俺の肌は越後の餅肌（エツゴのモツハダ）せ」が口癖だった。

国啓さんとは合宿が終わり、部室で装備を整理したあと、電車通りの「菊の湯」に行き、互いの背中を流しながら、合宿中の良かった点、悪かった点等を訥々として語ってくれたものだった。その後、「石松」へ行き、鯨刺（凍ったブロックの切身で現在のような高級なものではなかった）と納豆で丼飯を食べるのが楽しみの一つであった。

昭和35年の冬山は、屏風・慶応尾根より北尾根を経て前穂の登頂で、伊藤リーダーの下、後藤紀彦、出島五郎の諸氏と葛西でアタックした。5・6のコルのテントを早朝に出発し、前穂高頂上に着いたのは正午頃だった。帰途、5・6のコルに帰り着いたのは夕刻であった。その当時は全て麻ザイルを使用しており、凍って棒のようになったザイルは、ピッケルのシャフトで叩いて、ようやくパッキングする始末で、テントの撤収に手間取り、六峰を降り始めた頃は夜になっていた。月光の下で銀色に輝く前穂高と奥又白谷は息を飲むほどの美しさであったが、重荷と疲れも重なってバランスが悪く、凍結した斜面を降りるのは怖かった。このときに伊藤リーダーに「こんなところでアンザイレンしたら、一人の犠牲で済むところが全員オシャカになってしまう。皆、心して降れ！」といつになく厳しい顔で云われ、肝が縮む思いで降ったことが強く印象に残っている。

年が明けて、昭和36年の春山合宿は、北鎌尾根より槍経由前穂高までの縦走であり、岩本尹也リーダー以下、伊藤国啓さん、後藤紀彦氏の3名が縦走隊で、葛西、主計、奥島、出島のメンバーは涸沢経由、白出のコルのサポート隊であった。縦走隊とは白出のコルで合流し、4月13日の早朝に上高地での再会を約して別れた。縦走隊は、奥穂高から吊り尾根を経て、前穂高より岳沢経由で上高地。サポート隊は涸沢、横尾経由で上高地の予定であった。

その1時間半後に、岩本さんと伊藤さんが、吊り尾根稜線で遭難され亡くなられたとは、悲痛の極みである。合掌！

あれから45年も過ぎ、往時茫々となってしまったが、伊藤国啓さんをはじめ山岳部の諸先輩からカマ

シを含め、種々教示された事柄は、私のその後の生き方の指針となり、山岳部での素晴らしい体験は貴重な財産であったと感謝している。

新人合宿と岩本、伊藤両先輩の思い出

昭和36年4月13日、穂高岳吊り尾根で遭難

主計勤也

昭和34年4月29日（水）晴れ

初めて北アルプスに入山するため、気持が高ぶり、夜中3回も目覚め熟睡できぬ。午前4時頃、下宿から学校の会議室へ行く。納豆、味噌汁の朝食をとり、5時半、学校を出発する。松本駅には、今日入山しない4年生が見送りに来ている。満員電車で揺られ、松本駅を出る。美ヶ原がだんだん遠くなり、それにつられ、北アルプスの白い山々が見えてきた。

5時58分、島々着。6時15分、出発。参加者24名は、一列になり進む。重いザックと初めて持つピッケルの感触や、信大山岳部の一員になった誇りを肌で感じながら歩く。

6時45分、川の出合いに着く。これより島々谷に入り、トロッコの線路を川に沿って進む。

8時30分、ダム。川は左に大きく曲がり、道も狭くなり、周りの山と違って黒っぽく雪を持った山が見えてきた。

10時50分、岩魚留小屋。この頃より肩にザックが食い込み、息が上がる。最後の橋を少々登ったところで昼食、パン2個、パサパサで1個しか食えず。これから雪道の登りで、アイゼンを着ける。私はキャラバンのためフィットせず、途中ではずれ、列の最後になり、追いついては、はずれ、バテてしまう。尻を叩かれ登るがフラフラだ。あと1ピッチで峠のところで足がつり、倒れてしまう。すぐ岩本さん、伊藤さんが駆けつけて、足を見てくれる。屈伸や揉んでもらうがよくなる。岩本さんが私の重いザックを代わって持ってくれた。上のコルが見えていた。ザックが軽くなったので、ゆっくり進み、2～3のカーブを曲がって、コルの右手に雪の中から小屋の屋根が見え、やっと徳本峠に着いた。

目の前に初めて見る明神、穂高の山群が大きく座り、その下に細長く梓川が緑の林に囲まれ、静かに流れていた。感動と疲れで複雑な気持だった。夏みかんを1個食べる。甘味。5個分の価値である。うまかった。

16時、徳本峠発。下山も慣れぬ雪に苦勞し、尻セードで下る。そのため尻が冷えるし、濡れて気持悪しで、ようやく17時、明神着。上高地まで長かった。3回休み18時、テント地着。テント設営に時間を食って、遅い夕食となる。そうとう疲れる。テントは6名。体力不足、雪上歩行の未熟等反省多し。この日の日記はこれで結んでいる。

入部初日の山行は、散々なものでした。しかし、この日の山行で大変お世話になった岩本、伊藤両先輩の最後の合宿に一緒になるとは夢にも思っていなかった。

昭和36年3月30日から4月17日までの春山合宿縦走隊（岩本、伊藤、後藤）の奥穂高サポート隊（葛西、主計、出島、奥島）として援護する。

4月13日、穂高小屋にて、午前6時、全員で記念撮影する。縦走隊と声を掛け合って送り出す。ザイ

テングラードを下山中、後藤君より、我々と別れて1時間半後、吊り尾根第二峰から岳沢側に、岩本、伊藤両先輩がスリップしたとの緊急連絡を受ける。即座に救助組、大学本部連絡組とを決め、私は上高地まで状況報告と救助要請に走り、大学本部に一報を入れる。しかし、残念ながら2人とも帰らぬ人となった。

岩本さんの第一印象は、日記で「新人合宿のキャップは岩本さんがなる。この人は4月は前日ぐらいまで山に入っていたらしく、顔が真っ黒であるが、医学部で紳士的である。しかし、このような人が頼もしい」と書いている。白い歯をだし、ニヤーと笑う顔が目浮かぶ。

昭和34年新人歓迎登山の初日、県の森から桜清水小屋まで、我々（後藤、葛西、岡、主計あと一人不明）は先輩から案内してもらおう。途中、珍しい道祖神を見せてもらい、赤いカーテンを開けると、石に男女が合体した像が浮き彫りにしてあり、皆大いに喜ぶ。この紹介者が伊藤さんではなかったかと思う。皆、伊藤さんと云わずに「コッケ」さんと呼んでいた。丸々とした体力のある金時さんのような人で、福島弁(?)丸出しの素朴な感じの方だった。よく可愛いアイドル歌手の歌（パイナップルプリンセス?）を口ずさんでいて、愛嬌のある気さくな頼れる先輩であった。

特に、私は新人合宿で迷惑をかけ、助けてもらった。2人とも責任感が強く、下級生に優しく、山行でも頼りに出来る先輩であった。2人を遭難で亡くしたことは、部として大きな損失であり、返す返す残念である。お2人のご冥福を祈ります。



● ザイテンを降りる



● 奥穂高サポート隊（左から主計・葛西・出島・奥嶋）

山形文武君を偲ぶ

昭和39年8月23日、劔岳池ノ谷ドーム稜にて遭難

駒井 浩

数年前から、山形文武君の40年目の命日である2004年8月23日に彼を偲んで池ノ谷に行こうと計画を立て、それに照準を合わせてトレーニングしてきた。

しかし、その直前（一週間ほど）に霞沢岳で突き目になり、もう計画書も提出していたのに断念しなければならなくなった。

次の紀行文は、翌年リベンジで劔岳に行ったときのものであるが、山形君への哀悼の意を表してここに投稿します。

紀行文「じゃあ頂上で会おうな」

「じゃあ頂上で会おうな」と池ノ谷ドーム稜と右俣奥壁を目指す2つのパーティーは、稜線を隔ててそれぞれの岩壁に向かった。

右俣奥壁を登攀したパーティーは雨の頂上で待っていたが、池ノ谷ドーム稜に向かったもう一方のパーティーは登ってこなかった。

墜死した2人が翌日の台風による山抜け（幅80m、高さ800m）の中に消えてから41年経った。

今年7月25日、生き残ったパーティーの一人である私は、30数年ぶりの劔岳頂上で当時のこと、数年前から再開した登山のこと、今日これから下りようとする池ノ谷のことに思いを馳せていた。

41年前（昭和39年）8月、信州大学山岳会長野山岳部の我々7人は、劔岳三の窓コルにBCを構えて、放射状に岩登り合宿を行っていた。

8月23日、3パーティーに分れ、劔尾根（3人）、池ノ谷ドーム稜（2人）、右俣奥壁（2人）に向かった。

そして、ドーム稜の2人（そのうちの1人が山形文武君）が遭難（他の山岳会の人たちに確認された）し、その翌日台風の暴風雨により発生した山抜けに埋まってしまった。

今回、慰霊の意味をこめて劔に来たのは、三の窓に泊まり池ノ谷二俣から右俣を見ることが目的であった。

7月23日 黒四ダム→内蔵助平（泊）曇り一時晴れ

人でむせ返るダムから黒部川下流に向かうのは、単独行である私を含めて5人であった。

黒部川から分かれて水量の多い内蔵助谷に入ると、石楠花などの高山植物が目を楽しませてくれる。ところどころで現れる流れでのどを潤し、幸せを感じる。



●昭和38年秋 涸沢のテント場で 左端 山形

内蔵助平では狭い天場に先行パーティーがいた。

夜中に月が見えた。

7月24日 内蔵助平→ハシゴ谷乗越→劔沢二股→三の窓雪溪→三の窓コル（泊） 晴時々曇

ハシゴ谷乗越まではしばらく森林の中を過ぎ、後はほとんど石のゴロゴロした河原を進む。

最後の斜面をトラバース気味に登ると乗越に着く。

内蔵助平が牧歌的な暖かい雰囲気で見望するが、後立山は雲の中で見えない。

目を転じると、八ッ峰末端と劔沢の一部が見えた。

下り始めてすぐ、登ってくる3パーティー4人に出会った。今日はこれ以後三の窓コルまで人には出会わなかった。

花が美しいが、今回は行程が厳しいためゆっくり撮影する余裕がない。

河原へ降りたところで劔沢を渡渉する。

所々川にえぐられて仮設の迂回路となっているが何の問題もなく二股に着く。

二股には臨時の仮橋が架けてあった。

三の窓雪溪は下部で2～3箇所クレヴァスがあり、スノーブリッジやベルグシュレントを利用して越える。上部にも2箇所クレヴァスがあり同様に越える。

雪の厚みや下部の構造を観察して十分大丈夫と確信して通過したが、やはり単独行では多少の不安を感じる。

三の窓コルには先行パーティー（3人でチンネ等を登攀予定）が1組いた。

時々日差しはあるが、ガスっていて時折チンネが見えるだけで眺望は利かない。

標高2600mでありながら夜も気温があまり下がらず、明日の天気がやや心配になる。

7月25日 三の窓コル→劔頂上往復→池ノ谷左俣→小窓乗越→白萩川（泊） 晴れ後霧雨

上空は晴れているが、周囲に見えるはずの景色は全て雲海の下でしばしばガスにまかれるため遠望は利かない。

崩れやすいガラ場を昨日、一昨日の疲れで重い体を引きずり上げる。

池ノ谷乗越から後は快適な岩登りである。

劔頂上には30人くらいの人が見える。時折立山三山が顔を出す。

早月尾根にも八ッ峰にも人が見える。

テントに戻って撤収を開始し、池ノ谷側はガスで見えないが出発する。

150m位下りただろうか？ 雪溪が現れる。

上部二俣あたりで発達したクレヴァスに出会う。

最も狭い部分を探し（高低差2m弱、水平距離1.5m位）、ロープに縛り付けたザックを先に放り投げ、次いで自分も飛び降りる。戻るとしたら相当困難を伴うだろう。

雪溪は思ったよりズタズタで越える場所の選択に気を遣う。

雪溪にかかる頃から視界は悪く3～5m、時折ガスがひいても20～30mで、劔尾根も小窓尾根も目の前の部分しか見えない。

二俣に着いたが、やはり右俣も全然見えない。

今回の山行の主目的は、ここから池ノ谷を見ることにあったので、残念であるが、台風の接近を考慮するとゆっくりしてはられない。

三の窓から下り始めて暫らくして降り出した霧雨が止まないため、出来るだけ下まで下りることにす

る。

小窓乗越の取り付き点はテン場の続きにすぐ見つかる。

霧雨で濡れた足場は岩も草も木の根も全てツルツルに滑る。

小窓乗越で40年前を偲んだ後、下りにかかる。

益々滑る中を白萩川まで慎重に下る。ちょっと滑っただけでも単独行においては命取りになりかねない。

白萩川に下りて、適当な場所に設営する。

7月26日 白萩川→赤谷尾根乗越→馬場島～神戸 小雨後曇り

朝から小雨であるが、沈殿する余裕が無いこと、雨で増水する前に渡渉を終えたいことを考慮し、出発する。

渡渉は膝より少し上まで浸かって渡る。

赤谷尾根取り付き点も注意深く進めばすぐわかる。

この先は、渡渉を繰り返して川を下る方法と、赤谷尾根末端を乗越して下流へ出る方法があるが、渡渉の深さが不明であること、やや増水していること、単独行であることを考え尾根越えを選択した。

昨日と同様滑るものと覚悟していたが、条件は同じにもかかわらず全然と言って良いほど滑らない。

乾いている時には気が付かないのであろうが、岩質の違いからか？土砂も違ってきて更に植生もやや異なり、片方は濡れると滑りやすく、もう一方はそんなことが無いのではなかろうか？

馬場島に着いてタクシーを待つ間、シャワーを使わせてもらって（たった300円）、人間に戻った感じがした。

自分にとって特別である今回の山行は終わった。

これから時間をかけてこの成果を噛みしめようと思う。

山形君の墓参り

(1965年11月21日～23日の日記から)

昭和37年入部 文理学部人文科卒 小川 勝

11月21日

前から岡村君と約束してあったお墓参りに行く。山形の家へは8月23日の命日の日に行く予定だったが、やめて行かなかった。昨夜、泊っていった柿本君をそのままに、朝7時20分の急行に乗る。眠いので頭がボンヤリしている。昼に新宿に着く。新宿で昼飯を食べようとしたが、日曜日のこととて人出がすごく、どこへも入る気がなくて、そのまま上野へ行く。上野で常磐線の磯原駅までの運賃をみておどろく。490円もするのだ。学割の切符を東京、名古屋廻りの連続ですでに買ってしまっておいたので、このように高いのならと悔やむ。なにしろ、二人とも金が無く借金をしているのだった。準急に乗ったのだが、これが磯原に止まらなくて、二つ前の高萩という所で40分位待たされる。東京から3時間以上の長い道のりだった。

このあたりの方言は山形が以前に使っていた尻上りの言葉で、やはり山形の故郷だなと思った。駅からタクシーで家へいく。もう暗くなっていた。お母さんに会う。しばらくしてお父さんも帰ってくる。書齋

に山形の遺影を祭壇にもうけてあり、ビール、お菓子などがそなえてあった。彼が逝ってからもう一年以上にもなるのに、このように祭壇があるのは、お父さんもお母さんも片時も彼のことを忘れ得ないのだなと暗い気持ちになる。

僕としては自分の気持ちの上でも、山形の死に対して一つの句切りをつけるつもりだったが、彼の写真を見、お母さん、お父さんにありし日の彼を聞くと、どんなに彼が良い奴だったかが改めて身にしむ。アルバムを見せてもらい、彼の幼い時の話、中、高校時代の話など聞く。お母さんは何かにつけて彼を思い出そうだ。夕食をご馳走になり、風呂に入れてもらう。

彼は三人兄弟の真ん中で、お兄さんは弘道といい水戸の弘道館からとった名で、彼の文武という名前も弘道館の碑文からとった名だそうだ。弟の史郎君は今、東北大学の工学部にいるそうだ。ライダー部に入っているとのこと。彼が飛行機乗りになりたいと言っていたことの影響か。お父さんは教育者で、茨城県の高校の校長などもして、重要な色々の教育上のことを推進した熱心なひとである。現在は講師として勤めておられるとのこと。今でも、新しい試みをやるだけのファイトを持ち続けている素晴らしい人だ。お母さんは先生を勤めたこともあるとのことである。情のこまかい、しかも理性を失わないひとである。東京で山岳遭難者の慰霊祭があった時、NHKの報道人に答えて、「もう一度生き返っても、山へ行くなどは言わない。危険があるからといって全面的に禁止しては、伸びるべき、成長すべきものをつみとることになる。」という意味のことを答えられたそうである。お母さんは目も口も鼻も山形に良く似ている。

僕は持っていったスライド、山のスライドをお見せする。プロジェクターを持っていかなかったら、丁度、山形と弟の史郎君が小さい時に作った幻灯機を引っ張り出してこられた。ホコリがたまっているのをきれいにして、それで見ると。お父さんもお母さんも山形のものは何でも残してあるようだ。2年生の11月に、富士山で撮った写真もある。スライドの複写をしようと思っていて、とうとう今日までしなかった。お母さんの彼を思う気持ちを見るにつけ、僕は自分を責めた。帰ったら必ず複写して送ろう。夜の2時半頃まで、お父さん、お母さん、岡ちゃんと4人で話す。

11月22日

朝起きてご飯を食べおえたところへ、お父さんの教え子の人が来る。駅長を停年退職した人とかで、お付き合いはもう50年にもなるとのことである。お父さんがいかに優れた教育者であり、人格者であるかがわかる。

皆で少しはなれた彼のお墓に参る。まだ、卒塔婆だ。お線香をたき、花をあげ、合掌する。山形、お前



●昭和37年秋 八ヶ岳合宿 蓼科山頂上で

は本当に親不孝な奴だ。お前は本当に幸せな奴だ。こんな素晴らしいお父さん、お母さんがあって。馬鹿野郎、山形、何故死んだんだ。

山形の家のある磯原は茨城県でもずっと北のほうにあり、最近北茨城市となったが市とはいえないような所だ。常磐炭鉱が所々にあり、山といっても本当に低い丘みたいなのが海にせまっているのが北と西側だ。東のほうへ15分も行けば海だ。気候は温和だとのことである。海へ行く。砂浜が続いて、磯釣りをしている人もいる。久しぶりの海だ。やはり海はいい。貝がらをひろう。のんびりと一日ぐらい眺めていたい所だ。

お母さんに駅まで見送ってもらい、お父さんに水戸の街を案内してもらうことになる。お母さんとの別れはあっけなかった。言いたいことは一杯あるが口に出ない。出たのは月並みなお礼のことばだけ。

水戸の街は予想外ににぎやかで、自動車が多い。時間にせかされて弘道館と偕楽園好文堂をみてまわる。梅の名所だそう。いい所だ。お父さんがトックリを二つお土産に買ってくれる。帰りはタクシーで急いだにもかかわらず、4時の準急をタッチの差でのがす。

13分の電車に乗る。又も別れが来た。弁当まで持たせてもらう。お父さんは言う、「文武が帰って来たのだと思いますから、又、来てください。」僕は胸を衝かれて何も言えない。電車の扉が閉まる前に、お父さんは別れを告げて、急いで階段を登っていかれた。僕たちはただその姿を見送る。

11月23日

東京から名古屋へは臨時の準急“東海”に乗る。金がないので仕方が無かったのだ。朝4時過ぎに名古屋へ着く。歩いて家へ帰る。コタツで、10時ごろまで寝る。なにしろ疲れた。松尾さんに電話をしたが、ハイキングに出かけて留守とのこと。残念。

やはり家はいい。でも、僕は責任を感じず。家の人に申し訳ない。おばあさんは来年80歳とのこと。薪割りをしている。しなくてもよいのだがしている。母はだまって2万円くれた。先日、5千円送ってきたばかりなのに。

僕はこう言うしか言いようがない。

山形、

山形のお父さん、お母さん、

おばあさん、おふくろ、

俺は一生懸命生きるぞ。

俺は力一杯生きるぞ。

だから かんべんしてくれ。

追悼 佐藤正敏さん

1971年5月4日、アンナプルナⅡ峰、7,300M付近で遭難

お母様の、佐藤マツヨさん（2006年3月13日逝去）の追悼文を掲載いたします。

正敏、また春になり、おまえの生まれた平野にも、さくらんぼや桃の花が真っ盛りです。おまえがあんなことになってから、もう少しで一年です。おまえが出発するとき、私たちは羽田まで行ったね。あれが最後になりました。

もう一度家に帰ってくると言っていたのに、それもできずに発って行ってしまって死ぬなんて、母ちゃんは夢にも思わなかった。正敏なぜ死んでしまったの。小さいときから、なんでも私達のいうことを聞いてくれたのに、正敏が母ちゃんより早く死ぬなんて、本当に親不孝です。今度くらい自分の無学なのが悲しいと思ったことはありません。胸に思っていることの万分の一も言い表せないのです。

正敏、あなたは大学を出、初めて給料をもらった私達を関西旅行に連れて行くと母ちゃんに約束していたね。親子3人でそんな旅ができたらどんなに楽しかったでしょう。

45年の秋、私たちが長野に行ったとき、3人で歩いたね。私たちが“やど”に泊まり、おまえが寮に帰る後姿がみょうに淋しく見え、母ちゃんはおまえの姿の見えなくなるまで見ていたの。涙でおまえの姿が見えなくなったっけ。でもおまえは一度も振り向かなかった。今でも母ちゃんの頭から消えません。いつだって、いつだっておまえのことが頭から離れません。

正敏、おまえは本当にヒマラヤへ行きたかったの。生きても帰れない山に。母ちゃんはアンナプルナが憎らしいし、おまえの亡骸の有る山と思うと、どうしていいかわからないくらい懐かしい。正敏が冷たい氷の中にいると思うと、飛んで行って連れて来たいがそれもできず、母ちゃんはただ泣くばかりです。

11人も行ったのに、なぜおまえだけが死んだの。なぜ皆と一緒に帰ってこなかったの。母ちゃんはおまえを何としてでも助けてもらいたかった。おまえは母ちゃんの宝だもの。

今度行くのにも、どんなにかお金に苦労したでしょう。正敏、ごめんね。母ちゃんがどんなことをしても頑張ればよかったのに。二度と帰らない死出の旅だったのに。

世間の人、日にちがたてば忘れられると言いますが、一年たった今、悲しみが余計胸の中にかたまり、正敏はほんとに死んだのだと思い、この悲しみがうすらぐとおまえとの“縁”が遠くなるような気がし、悩みも母ちゃんの運命だと思っています。

おまえの形見の品々も、あれば悲しみのたねになるけれど、何物にもかえがたい宝です。おまえがいつもくわえていたのでしょう歯形のあるパイプ、母ちゃんもくわえてみました。おまえの最後の場所にあったという赤い防寒手袋をおまえだと思い抱きしめると、母ちゃんごめんという声が聞こえるような気がします。

正敏、どんなにか残念だったろう。おまえの日記の最後に、「大変なことになった。責任重大だ。どうか神様、ピークに立たせてください。松尾さんどうかよろしく願いいたします」と。おまえは余りに責任感が強すぎる。もっと早く戻ればよかったと母ちゃんは思う。いろいろのことを母ちゃんはあとから聞いた。身体が悪かったとか、自信過剰だとか、命がけで登ったおまえに、それが嘘の言葉だったのでしょ。母ちゃんは分かります。おまえの気持が誰よりもよく分かります。母ちゃんはおまえを優しい想いやりのある誰にも恥ずかしくない立派な気持をもった息子と思っています。



●アンナプルナⅡ峰BCにて



●アンナプルナ遠征の練成合宿、奥又池のキャンプで右端が佐藤君。



●佐藤正敏君の七回忌、カルカッタにて。右から、弟敏信さん、お父さん、お母さん。故牧晃一さん、葛西さん、渡部光則さんの顔も見える。

こんなことを書きながらも、真っ黒い顔に白い歯を見せて、笑いながら帰ってくるような気がしてなりません。

本当に死んだのだ。いつまた生きて帰ってくると思いながら、おまえのお墓も皆々様のご尽力でできます。おまえの好きだった吾妻連峰の見える田圃の真ん中の、おまえが2年生の春休みに帰ってきたとき、父ちゃんの代わりに「わりあて人夫」に出て造ったお墓です。

正敏、本当に死んでいるのならどうかここに帰ってきて、私たちや姉弟を見守ってください。私達も年です。そのうち、あの世とやらで、おまえに会える日を楽しみにしています。

ヒマラヤに逝った佐藤正敏への哀悼

武藤 一郎

我々の間では、佐藤正敏はボロと呼ばれていた。彼は小生の1年後輩で身体が大きく体力もずば抜けていて、当時マンガに出て来た大型ロボットに因んで自分のことをGR1と称していた。確かGR1はGiant Robot No.1の略だったと思う。しかし、我々他の部員は誰もGR1とは呼ばず「お前はロボじゃなくてボロだよ」とボロにしてしまった。

あれは小生が3年生、彼が2年生の多分6月頃だったろうか、二人で組んで鹿島槍ヶ岳の北東面にある大川沢支流の奥を登ろうとしたときのことだった。目指すは天狗尾根の北側に入り込んでいる沢の奥にある岩稜というより岩壁である。沢の下部にはまだ大きなスノーブリッジが残っており、上部は完全に残雪が沢を埋め尽くしている。その残雪の上に、雪解け後の緩んだ石が高度差100メートル、200メートルをあの空気を震わせる独特の飛翔音を立てて落下している。「こりゃ、かなりヤバイなあ」と言いつつも、それではとすぐ退却するのも憚られる。観察していると落石は一定時間ごとに落ちており、岩壁途中の張り出し部分に当って放物線を描くので基部には落ちないだろう、タイミングを見計らって基部まで辿り着ければ取っ付くだけは取っ付けるだろう、基部から左上に斜めに登れば落石コースは避けられるだろうから、そこで状況を見て考えようということにした。結局、取っ付いたことは取っ付いたが、ルートは安定しておらず登攀に時間が掛かり、落石は基部でザイルをビレーしているボロの近くにも襲ってくる。早々に「ここは止めて天狗尾根に変更だ」と撤退したが、今から考えると何もわざわざ基部まで行って登攀を試す必要はなかったと反省している。ホント、ヤバかったね。ボロがえらいのは、こうしたヤバイ状況にあっても、聞かれれば意見は言うが、自分からは余計なことは口にせずいつも冷静に物事を見ている点だ。

さっきの奥壁に引き換え天狗尾根の安定した岩の感触の良かったこと。折から雷雲が降りているのか、途中の岩のリッジでは身に付けているガチャ類が雷様に反応してビーン、ビーンと鈍い音を立てるが、



● 43年度春山 後列左から：武藤・佐藤・笠原・市野
前列左から：扇能・照井



● 北海道日高にて

を述べるわけでもなく、ただ辞めたいということなので伊那から松本に出かけて話し合った。確か、山下泰弘やボロの同期も一緒だった。随分と長い時間を掛けて話したと記憶している。何か他人に言えない事情があったのか、あるいは本心かどうか知らないが、別にはっきりした理由があるわけではなく、ただ何となく辞めたいと言う。こちらは、そんないい加減な状態でやめれば後で後悔するぞとかなんとか言って押し問答みたいな話をしたと記憶する。

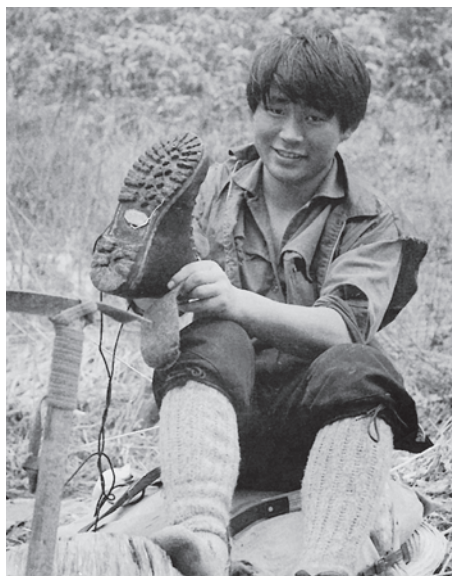
結局、ボロは部に残ることになった。その数日後、ボロからの封書を受け取った。その手紙には、彼は故郷の福島に帰省する前に一旦はやめたくなくなったが、また続けさせてもらいたいと書いてあった。先日、荷物を整理してこの手紙が出て来た。

鹿島槍での登攀では二人ともなんとか無事だった、山梨での車の事故でも大事に至らなかった、そして部に残っていなかったならばヒマラヤに逝くこともなかったかもしれない。人間万事塞翁が馬と言う。部に残ったのは彼自身の決めたことであり、他人の説得で翻意したなどと彼に失礼なことは思わないが、あの時、あのまま彼が退部していればヒマラヤで死ぬこともなかったかもしれないと思うと複雑な気持ちではある。

ボロの冥福を祈る。

佐藤正敏君の思い出

昭和42年入部 井関芳郎



昭和42年（1967年）4月、憧れの信州大学に入学し、キャンパス内のプレハブ小屋で山岳部のガイダンスが行われた。20名ほどの入部希望者が集まっていた。その中でひとときわ図体のでかい男がいた。ややなまりのある東北弁を話していた。その男が佐藤正敏であった。

彼は福島県の出身で高校時代も山岳部に所属し、北海道大学を志望していたが、受験に失敗して信州大



●初の海外遠征で緊張気味の佐藤
羽田空港にて

学に入學し山岳部に入部したのであった。

新人合宿、強化合宿、夏山合宿、秋山合宿と山行を重ねるうちに新人部員もひとり減り、ふたり減りとだんだんさびしくなり、春山合宿（劔岳北方稜線、宇名月から池ノ平山）に参加した新人部員は4名のみとなり、結局4年部員までこの4人が残ってしまったのである。

今、その昔を振り返ってみると、佐藤とともに登った山々が昨日のここのように鮮明に思い出される。

3年部員の春に2人で行った北鎌尾根から穂高滝谷、岳沢の連続登攀を計画し、北鎌尾根を登攀し、次いで滝谷を登攀しようと北穂頂上直下でのビバーク中に雨に遭い、パンツまでずぶぬれになって滝谷の登攀を断念して涸沢に下り、身体を乾かして改めて上高地から岳沢に入り、こぶ尾根を登攀した。その帰り、天狗の科尔から岳沢に下ったが、岳沢小屋の下まで来た時、畳岩にから大ブロック雪崩が発生し、轟音をとどろかせて落下してきた。岳沢を下っていた私達の足は止まり、轟音とどろく畳岩を見上げた。大きなブロックが天狗沢に落下していた。思わず佐藤と顔を見合わせてしまった。早く天狗沢を抜けていて良かったなと安堵の顔があった。その後私たちが歩いている登山道のはるか下まで雪崩の末端部が流れていった。穂高でこれほど大きな雪崩に遭遇したのはこれが最初で最後であった。

3年部員の夏、佐藤がリーダーで北海道の日高山脈の縦走に行った。3年部員2名、新人2名の計4名で沢また沢をたどり、神威岳、中の岳、ペテガリ岳、ヤオロマツ岳、そしてカムイエクウチカウシ岳を目指したが八の沢カールまで来た時、新人のTの疲労が激しく動けなくなってしまった。何とか八の沢出合いまで降りてきて休養をとったが体調は思わしくなく、自力での歩行は不可能であった。

自衛隊のヘリコプターに救援を依頼するか、林道まで自力で担いで下ろすか二人で相談をしたが、結局佐藤がTを負ぶっておろすことにした。私ともうひとりの新人のOと2人で4人分の荷物を背負い、佐藤が疲れて担げなくなった場合には交代することとしたが結局佐藤は林道の車が入るところまで担ぎとおしてしまった。そして先行したメンバーが手配したタクシーで帯広の病院へ収容したのでした。

このときほど佐藤の偉大さを感じたことはなかった。

4年部員の時の新人合宿、私がチーフリーダーで穂高岳・槍ヶ岳で行った。佐藤はスキーを持って行きたいと希望した。彼は以前から登山にスキーを使って山行を行いたいと話していた。実際、山行にスキー

を持参したこともあったが、積雪期登山には輪かんじきを主として使用していた信大山岳部はなかなかスキーを取り入れた山行計画は極めて少なかった。部員間でもスキーの上級者もいれば、全くスキーをしたこともない部員もおり、また、北海道と違ってアプローチが短く、積雪期でも取り付き点近くまで車が入るという利点があり、スキーを十分に活用する機会も少なかったと思う。

この合宿で上級部員3名がスキーを担ぎ上げ、北穂沢、アズキ沢に見事なシュプールを刻んだのであった。アズキ沢を滑り降りた佐藤は喜色満面であった。

同じく4年部員の冬山合宿、穂高岳にて行った。その合宿の最後に私と佐藤の二人で西穂高岳から奥穂高岳、穂高小屋に泊まり、再び奥穂高岳へ登り吊り尾根を経て、前穂高岳、明神岳、明神岳五峰から上高地に下山するという山行を行ったが、これが佐藤との最後の山行となった。

重いキスリングを背負っての厳冬期の穂高の山稜は極めて厳しいものであり、大きな不安もあったが、佐藤と二人で行動したからこそ、成功することが出来たと今も思っており、感謝する次第です。

ここに、2枚の写真がある。羽田空港の旧国際線ロビーで撮影した写真である。見送りの仲間にも囲まれている佐藤と一人ロビーに佇む姿。昭和47年2月7日先発隊として松尾さんとアンナプルナⅡ峰遠征に旅立つ日の佐藤である。これが私達が目にした最期の佐藤の姿となってしまった。

佐藤は24歳の若さでアンナプルナの氷河に消えてしまった。あの日、昭和47年5月4日から35年の歳月が経ってしまった。もし、佐藤が生きていたら、今頃社会のどんなところで、どんな活躍をしていただろうかいつも頭の中のどこかで想い続けている。

冬山や春山の吹雪の日の行動を終えてテントに戻って来たとき、「あー、しごかれたじ」とにやりと笑いながらテントに残っているメンバーに帰テンの声をかけていた佐藤の声が遠く聞こえ、いまだに夢にみる。「あー、しごかれた」と言って戻って来た夢を何度見たことか。佐藤は未だに私の心の中に生きている。



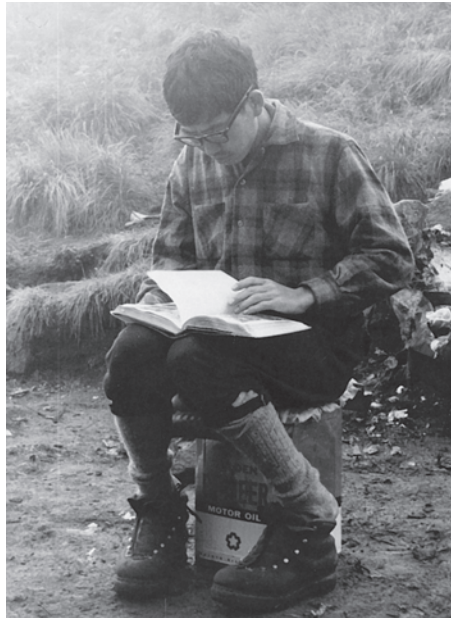
●大勢の仲間から見送りを受ける佐藤

片岡 格 先輩を惜しむ

1979年11月24日、富士山つばくろ沢で遭難

西郡光昭

あの夜のテレビ・ニュースを見たときの驚きといたらありませんでした。全身の血の気が失せるばかりの衝撃でした。あの富士山には、私も別の会のトレーニングで出かける予定にしていたのですが、急に



●奥又白池で高山植物図鑑を見る格さん

都合がつかなくなって参加を取りやめたのでした。所在無さを紛らわすべく、家族を伴って生家を訪れ、老父と晩酌を重ねるうち、七時のニュースで格さんの遭難を知ったのです。

「なに！ 格さんが！……」その後は言葉になりません。まさかとも思ったが、アナウンサーの声は冷静しかも正確でした。家人も驚き、私は平静を装うのですが、気はすっかり動転していました。信大OBの誰彼に連絡しなければなりません、手元には住所録もありません。タクシーで一人自宅へ急ぐ車中、何度も悔しさがこみ上げてきて、「格さんが……。そんなバカな……」そうくりかえしては無念の涙を拭いたことでした。

格さんと井草の教会でお別れしてから、もう二ヶ月になろうとしています。あらためて格さんとの出会いから、最後にお会いしたときまでのことを思い返しますと、格さんがいかに大きくて豊かな人間性を持った方だったかを感謝をこめて思い知るのです。先輩格さんに叱られた覚えが無いのは私だけではないでしょうが、反対に諭され、慰められたのは一再ではありません。あの眼鏡の奥の眼差しは、いつも優しく語りかけ、お会いしてから足かけ二十年このかた、その瞳が陰しく人を射たことなどついぞありませんでした。

奥又白の岩場合宿のこと、冬山合宿に応援に来てくれたこと、袴越や乗鞍でスキーを教えてもらったこと、アンナプルナⅡ峰遠征、鳥海山のスキー登山、そして最近ではガネッシュ遠征のまとめ役として活躍されていたことなど、ご一緒させていただいた思い出の数々はいつも思いやりに包まれていました。

私が格さんに本当に支えていただいたのは、信大のネパール・ヒマラヤ遠征（1971年）で、佐藤正敏君を失ったときでした。この事故は、隊長だった私の戦術のまずさにあったことは、逃れるべくもありませんでしたが、ともすればへたり込んでしまう私に、「ガマちゃん！ 佐藤の死は、本当に悲しいし、悔しいが、現実には現実だ。あとは残る日程もあるのだから、しっかりしなきゃダメだよ」とやさしく諭されたことでした。思えば格先輩は出会われるすべてに、あのやさしい心根で接しられたに違いありません。山の連中だけでなく、おそらく奥さんにもそうだったことでしょう。そして酒にも、パイプにも、山の本にも、スキーにも……。そのスキーで遭難されるとは、何とも悔しいことではありませんか。

覚えていますか格さん。三十六年の岩本、伊藤先輩の遭難の山岳部葬を。あのとき、友人代表で弔辞を

述べることになった格さんは、頭が混乱しているから、原稿を書いてくれと云われましたね。わたしも困ってしまいましたが、大の仲良しの二人を失って落胆されていた先輩のいつけだったので、無い知恵をしぼって拙文をお渡ししました。

霊前では、「後輩に書いてもらったが、涙がでてとても読めないから……」と原稿なしで、二人を失った痛恨の情とお別れを切々と捧げられました。読めなかったのではなかったのでしょうか。わたしの文が余りにも紋切り型で、無二の親友への弔辞にしては、味も素っ気もないものだったからでしょう。格さんにはそういう思いやりの心のあることを知らされたのでした。そして今、今度は格さん、あなたへの追悼文を書くことになろうとは……。

しかし、格先輩とはいづれまたどこかでお会いできるような気がしてなりません。

「ガマちゃん、いつ出てきたの？ まあ一杯！」

だからいつものようにこう言うとお別れいたします。

「大変お世話になりました。また出てきます。格さんもお元気で……」と。



●北海道のスキー場にて



●鬼怒川にて



●乗鞍ヒュッテにて左から2人目が片岡格さん

格さんとの思い出（故片岡さんを偲ぶ）

秋元 恭浩

（現在、ニューヨーク慶應学院勤務）

格さん、長いことご無沙汰しました。私を「ヤン坊、ヤンボー」と呼んでかわいがってくださいました。小学校五年生だった私も五十歳を過ぎました。

板谷叔父に連れられて乗鞍ヒュッテに泊を許されたのが小学生の頃でした。毎年、学校が冬休みになり、お古のスキーを担いで出掛けるのを楽しみにしていました。格さんには、梯子段をのぼった三階屋根裏部屋に呼んでいただき、愉快的山岳部OBの方々の輪のすみっこに置いてもらいました。一杯できるようになるのはそのずっと先ですが、馬刺を生姜醤油で食べることを教えてもらいました。眼鏡の奥で目をクリクリさせ鼻を赤くした格さんの飲んべえ姿はいつも陽気でした。

東京育ちで雪や寒さに我慢がきかず、手が冷たいと言う私に格さんはご自分のスキー手袋と交換してください、リフトに乗れるようになるまではとヒュッテの裏山でボーゲンの練習につき合ってくださいました。数年経ちゲレンデで習うようになりましたが、鳥居尾根リフト脇の深雪斜面を華麗に滑り降りて行かれた後に、転んで雪まみれとなり笑って斜面を登ってこられた格さんらしいシーンは今も鮮明に思い出されます。

私のスキーと飲んべえとの出会いの原点に格さん有りです。本当に有り難うございました。今もきっと天国の皆さんと陽気に過ごされていることでしょう。

合わせて、私を長きに渡りあたたかく育ててくださった岡崎猛、三和子ご夫妻はじめ多くの方々に、この場をお借りし深く感謝申し上げます。

秋元恭浩氏は、学士山岳会員板谷真人氏の甥っ子で、幼いときから乗鞍信大ヒュッテで、山岳部OBに可愛がられた方です。



●昔の信大乘鞍ヒュッテの玄関で、平邦彦夫妻と当時のヤン坊。

片岡格先輩の御霊安らかに

故 牧 晃一

「アラヨッ！ アラヨッ！ アラヨッ！！」私は必死で叫び続けていた。

「格さん！ 返事してください。どうして返事してくれないんです。どうしてなんです」

「アーラヨッ！ アーラヨッ！ アーラヨッ！！」

「こんなに大声で叫んでいるじゃないですか。いつも仕事のこと、人生のこと、山登りのことで兄貴のように相談に乗っていただき、いろいろと面倒を見ていただいたマキですよ。忘れたんですか。信大学士山岳会東京支部の山行で、秋の北岳バットレス、冬の北岳バットレス、三ツ峠の岩場、奥秩父の岩場、それに関東周辺の間々に共に登ったじゃないですか。冬には乗鞍へも富士山へも八幡平へも共に行き、楽しくスキーを滑ったじゃないですか」

「まだ思い出しませんか。なんぼなんでもそんなことないよ！ 日本一のカーチャン貰われたからといって、今更知らん顔するなんて、冷たいなー、ねー、格さん！！ 先輩！！ 返事してくださいよおー！！」

「僕一人置いてきぼりにするのですか。そんなに早く行かないでくださいよ！」

「一本立ててください！ 格さん！！ 先輩！！」

しかし、前を行く片岡先輩は振り向きもせず、どんどん朝日に向かって歩いていく。

私は必死で追いかけるのだが、何故か足がもつれて思うように動かない。その差はどんどん引き離される。片岡先輩の後姿がだんだん小さくなる。そして光の中に吸い込まれるように、その姿は点となり、そして消えてしまった。私はなおも必死で叫び続けた。

「ダメデスヨウー！！ そっちへ行ったらダメデスヨウー！！」

「引き返してくださいーい！！」

「格さんー！ 先輩！！」

「アーラヨッ！ アーラヨッ！ アーラヨッ！！」

「引き返してくださいーい！！」

しかし、声もかすれ、咽も裂けんばかりの私の必死の叫びも無駄であった。

「夢か？ 夢か？ 夢か？……ハッ！！」と朦朧とした意識から我に帰ったとき、「夢であってくれ……」と、魔の11月24日のことでした。しかし、現実には夢として消し去ることはできなかった。



●アンナプルナⅡ峰 C2・C3 間で一休み

“冬富士の 雄々しき姿 真白にぞ 御霊やすらく 雪のつばくろ”

私の人生に多大なる影響を与え、優しい、思いやりのある、私にとって掛け替えのない良き先輩であったのに。

「何故！ どうして！ そんなに早く逝ってしまわれるのです！！」

“格さんの 逝きし御霊は 今いずこ 富士の懐 安らかに眠れ”

福島 渉君 追悼

1981年8月6日、グランドジョラスで遭難

小根田一郎

1. 事故概要

昭和47年入学の福島渉君は、山岳部卒業後の1980年に信州大学学士山岳会ガネッシュヒマールⅢ峰遠征隊に参加した後、ネパールにてしばらく暮らし、翌1981年夏にヨーロッパに行き登攀活動を行った。そして、1981年8月6日グランドジョラス登攀中に大規模な岩雪崩に遭遇し、帰らぬ人となった。

ヨーロッパでは井手さんという方とパーティを組んで登攀していたようである。井手氏ご自身も福島君と共に岩雪崩に巻き込まれ帰らぬ人となった。グランドジョラスの現場で同じ岩雪崩に遭遇し負傷した日本人クライマーがいた。現地で福島君と知り合って行動を共にし、グランドジョラスでは福島・井手パーティの後続パーティの一人として登攀していた。大塚俊明さんという方である。以下に、1981年7月22日～8月6日の行動と、事故当日の状況とについて、その大塚俊明氏からお知らせ頂いた手紙より抜粋して掲載する。

——（以下、大塚氏の報告）——

さて、昨夏の福島さんとの行動についてですが、私はドロミテへ出かける前日に井手氏の紹介で彼と知りあいましたので、7/22～8/6までの行動しかわかりません。お役にたてるかどうかわかりませんが、その間の彼との行動についてお知らせしたいと思います。

7/22 午前10時シャモニー発。クールメイユールで昼食を取り、ミラノに寄ってから午後10時頃ボルツァーノに着く。ボリスの紹介で、ホテルスタッショ（ステーション）泊。

7/23 ボルツァーノからコルチナ経由でトレチメラバレドヒュッテまで。

7/24 福島・井手パーティでチマ・グランデ北東麓へ。私たちはチマ・オベストのカシニルートへ取り付く。そのうち天気が大雨となり、いずれも下降。悪天が続きそうなため、アウンゾロという町まで車で下る。

7/25 本日も雨。午後から天気が良くなりそうだったため、ラバレドに戻る。

7/26 AM11:00 ごろから4人でチマ・ピッコリシマ、プロイスクラックに取り付くが4ピッチ登ったところで今度は雪が降り出し下降。

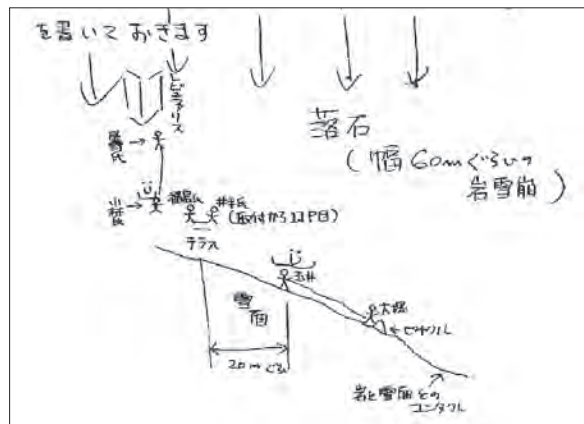
7/27 福島・井手パーティでチマ・グランデ北東麓（Ⅳ）完登。私たちはグランデコミチルートに向かう。コルチナまで車で下る。

- 7/28 移動日。最初、マルモラタに向かうが状態悪く、セラ峠の少し下にテントを張る。
- 7/29 4人で午前中にセラ第1岩塔ウエストリッジ (IV+)、午後、第4岩塔西壁ダイレクト (V-) を登る。
このころよりドロミテ地方の天候が安定する。
- 7/30 午前中は町で買い出し。午後、セラ第2岩塔北綾 (V-) を登る。
- 7/31 休養
- 8/1 ピッツ・デ・キャバチエス南壁ミケルツイルート (VI) を5時間で登る。
- 8/2 ボルツァーノまで下る。
- 8/3 ボルツァーノ～シャモニ
- 8/4 終日4人とも井手氏のアパートでごろごろしていたが、天候が安定しているので、私と玉井で明日からグランドジョラスに行くことを決める。我々の話で井手氏も行きたくなくなったのか、福島氏に声をかけ、結局、再び4人で登ることになる。
- 8/5 昼食をシャモニのレストランでとり、モンタンベールへ上がる。ここで手島氏と別れ、レシヨ小屋に入る (PM4～5ごろ)。ものすごい夕立がある。レシヨは満員で、そのほとんどがウォーカーに向かうという。
- 8/6 AM1:00起床。ガイドのイバン、ギルラディニたちはこの頃出発する。天気は快晴だが気温が大変高い。私は79年にもジョラスへ行っているが、気温が全然違う。大変気になる！ AM3:30出発。氷河のルートファインディングに手間取り、取り付きは6:30。この日に限って、福島・井手パーティが先行する。これは私たちの調子があまり良くなかったためである。10:30ごろ、福島パーティはレビュファクラックの1P下のテラスで先行パーティ (日本人) の順番待ち。我々はその下のピッチで玉井がリード、私がビレイしている時に事故発生。上の方で“ドーン”という音響がして、井手氏の「今度は大きいぞ」という声が聞こえ、上を見ると、空が真っ黒になるほど石が落ちてくる。思わずしゃがみこんだが、そのうち二つが私の頭と肩下に命中。激痛でザイルにぶらさがりながら目を開けると、砂けむりの中に人影が見え、その人に向かって玉井が「井手さん！ 大塚さんに石が当たった」と叫んでいる。すると、その人が「井手さんはそっちにいるんじゃないの？」という。先行パーティの小林氏であった。その時になって初めて福島、井手両氏の転落を確認する。すさまじい落石で、福島さんたちがそこにいたという形跡すらなくなっていた。ただ下の雪面に血がベツトリついていた。「彼らの声すら聞こえなかった」小林氏も言っている。和ダンス1個分位の落石がボロボロ落ちてきたのである。両氏の遺体と我々は10時間後、ヘリで収容された。
- 以上 簡単ですが、私の知る限りのことを書きました。
- さて私が初めて福島氏に出会ったときとくに最初にラバレドに着くまでは大変無口でいつも気むずかしい表情をしていて正直言ってさわがしい私などはあまりいい印象を持ちませんでしたが、それも最初のうちだけで、性格が正反対のためか、以後、たいへん気があい、楽しい一時を過ごすことができました。えてして山を困難という尺度でしか計れない私などは彼とエーデルワイスの花をつみながらブラブラ話しているうちに色々と考えさせられることもありました。
- グランドジョラスに向かう時、彼は「ボクにはこんなところは登れないよ」と言い、初めはしぶっていましたが、私たちの「だいじょうぶだよ」という声にやっと参加する気になったようです。そしてこの登攀を最後にアルバイトを始めると言っていました。
- 今回の事故はジョラスでは珍しい落石事故で、運が悪かったと言えばそれまでですが、気温が高いことはわかっていたのだから、もう少し早発ちしていたら、と今になって思います。

最後になりますが、事故当時の概略図を書いておきます。
 なお、後の調べで、落石は三角雪田あたりからの自然落石ということでした。

— (大塚氏の報告、以上) —

(文責：小根田)

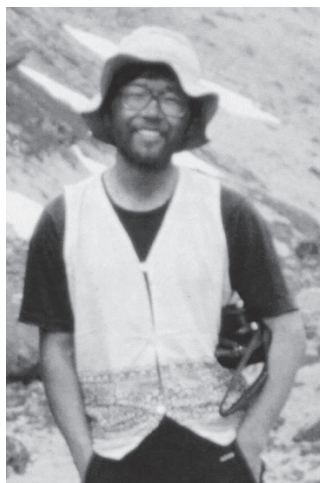


2. 「タルちゃんのこと」

昭和 47 年入部同期生 牧瀬敏裕

タルちゃん (= 福島君) と初めて僕が出会ったのは、春の遅い松本にも暖かな日射しの差し込む五月の部室の中だった。大学紛争の煽りで一ヶ月遅れた入学式を済ませた新入生の何人かが、山岳部のプレハブの部室に集まっていた。それら新入生のほとんどは体もゴツイ連中ばかりで、一抹の不安を感じ始めた僕の目に飛び込んできたのがタルちゃんだった。僕と同じくチビで貧相な印象さえ受ける君に安心感を抱いたのを今でも僕は覚えています。

それから半年後、初めての冬山を迎える頃には約三十名いた新入部員も、ヘラクレスの異名をとる吉田君以外には、タルちゃんと僕の三人だけになってしまった。同じチビでも何事にも器用で、僕より体力もあるタルちゃんに対して、僕はいつも羨ましさを感じるほどだった。そして、初めての冬山の槍ヶ岳に行っ



●ガネッシュヒマールⅢ峰遠征隊にて

た時、君のステップの後ろを歯を食いしばってついて行ったこと。靴もガチガチに凍った寒い朝のエッセン当番の時、すすんで外に炊事用の雪を取って来てくれた君のこと。今でも目に浮かぶようです。

伊那の農学部に行ってからは、同期は二人だけで、頼りない僕をいつもカバーしてくれていたのは君だった。伊那の街で一緒に酒を飲んだ後、タクシー代がもったいなくて、寮まで五キロの道を二人で歩いて帰ったりした。その時、大声で好きな女の子の名前を叫んでたタルちゃん。

その君が、はるか遠いグランドジョラスで逝ってしまうなんて、誰が信じられるだろうか。あのさわやかな微笑みも、あの「法善寺横丁」の歌声も、あの「アーア」のため息ももう二度と聞くことができないなんて、僕の山岳部時代のほとんどが失われてしまったような気がしてなりません。

3. 「福島 渉へ」

中田 茂

なんで死んでしまったのかな。どうしてもわからない。山とはそんなに人間を駆り立てるものなのだろうか。岩ナダレなのだから、それも自然落石によるものらしいから、不運だと言ってしまうばそれまでののだが。ぼくにはわからない。ぼく自身もわけもなく、山に駆り立てられているけれど、山とは君にとって何だったのだろうか。ぼくが思うに、君にとって山とは、小鳥のさえずりや、可憐な花の表情や、風の音、がその中心であったと。でもどうしてアルプスの山登りに君の最後を集約してしまったのだろうか。大学で岩登りをやり残したからなのか。それとも次のヒマラヤ行の準備だったのか。いややはりアルプスはそれだけで完結していたと考える方が正しいのだろう。君はただアルプスの岩にふれてみたかっただけなのだ。でもただ登りたいという君の要求にしてはとり返しのつかない結果になってしまった。

君が大学一年の時、寮の炊事場で焼きいもをしている姿が眼に浮かぶ。あの時君はぼくには口もきけなかった。ただハイ、イエエしか答えなかった。酒も飲めなかった。でも三年もしたら、見違えるように変わりましたね。酒も飲んだし、下級生からも恐れられていた。和尚さん、女の子とつきあうにはこうしないとダメですよ。和尚さんは意気地がないから女にもてないですよと逆に説教をしてきたね。君の指摘はあたっていると思う。もう一度、君のお説教を聞きたい。なぜもう一度ガネッシュに行かないのだ福島



●ガネッシュヒマールⅢ峰遠征隊にて（左から二俣・藤元・福島）

よ。どうしてそんなに急いでしまったのだ。俺はユックリ行くよ。でもお前がないのが悔しい。悔しいから酒を飲む。飲めば悔しさが増す。福島よ、なぜ俺と山登りを続けてくれなかったのだ。俺といっしょだったらと思ってしまう。君はもうタメ息をつかないでいいよ。俺に残していったのだから。

4. 「追悼」

師田信人

山を攀じている時、誰でも何らかの形で“死”というものを意識してると思う。それはいつも背中合わせにあったのに、意識の底ではその存在を拒み続けている。でも、それが逃げられない現実になることを、否応なしに認めさせられることもある…三井さんから福島さんの遭難の連絡を受けた時、言いようのない驚きと同時にそんなことをぼんやりと考えていた。

僕が初めて穂高の岩に触れたのは大学1年の秋山、福島さんはその山行のリーダーだった。何も分からない僕等を、前穂の東壁や滝谷に連れていってくれた。いつも関西弁丸出しで、酔うとえらい威勢よくなって、そして何より歌と料理が抜群だった。僕はけっして福島さんとザイル結んだり、パーティーを組むことは多くなかったけど、そんな事、思い出したら切りがない。

GANESHの遠征で福島さんがすごく活躍したこと、その後ずっとネパールに残り、障害児の施設でボランティアしてたこと、それからアルプスの方に行ったことなど、みんなの噂で耳にしていた。みんなと一緒に日本へ戻ってくるとばかり思っていた僕はちょっと奇異に思いはしたけど、福島さんも大分行動的になったなあくらいにしか思っていなかった。聞けば、福島さんはボランティアや岩を攀じる中で充実した生活を送ってたとのこと、きっと日本の生活では得られない充実した自己の存在感を味わっていたんじゃないかな、なんて今思う。でも、その前提になる“生”を失ったら何にもならない。こんな事、改めて僕が言わなくても福島さん自身十分承知してたろうけど…。

福島さんは未知なるものへの夢とロマンをいつまでも追っていたのかもしれない。僕等が卒業し、社会



●ガネッシュヒマールⅢ峰遠征隊にて(左から下田・福島)

人という切符を手にした時、多くはいつか忘れていってしまうものを…。

“あほか、はよ酒飲め” “ビビるなァ、小便チビリそうや” そして十八番だった “包丁一本、さらしに巻いて〜” そんな声が聞こえてきそうだけど、福島さん、こんな雰囲気、好きじゃないだろうな。

(1981.9月16日 巨摩にて)

5. 「福島渉君のこと」

井関芳郎

8月8日、土曜日の朝のことだった。手にとった電話の受話器の奥から聞こえてきた声は聞き覚えのある宮崎さんだった。一瞬我が耳を疑った。声が出なかった。「グランドジョラスで、福島渉君が遭難し、死亡した」との事であった。

話は今から10年程昔に遡る。私は就職し、伊那から松本に舞い戻っていた。そして、当然の様に思誠寮に足繁く通っていた。寮生（もちろん山岳部員も大勢いた。）と毎晩の様に酒を酌み交わす生活をしてきた。新学期でもあり、一杯やっている座の周囲には、必ず新入寮生もいた。

ある晩、その座の中に一人の新入寮生がいた。かしこまって正座していた。古顔の寮生が、「福島君は山岳部の新人ですよ。」と言った。「そうか、それじゃ一杯やれ。」と一升ビンから酒を注ごうとすると、「僕、酒飲めません。身体中にジンマシンが出来るんです。」と、ボソボソと口を開いた。山岳部に変わった男が入って来たなと思いつつ、一升ビンを置いてしまった。それが福島君との初めての出会いだった。

その酒によるジンマシンに悩んだ彼も、次第に酒を口にする様になり、遂にジンマシンを克服してしまったという。

彼と山行を共にした事は、ほとんどなかったが、コンパではよく顔を合わせた。彼の十八番は「包丁を一本、晒に巻いて、旅に出たのも、板場の修行、待っててこいさん、悲しいだろが…」と唄う『花の法善寺横丁』であった。今でも耳の奥に残っている。

さて、彼も卒業し、私と同業種のある大手の会社に就職し、新潟へ行った。仕事の内容も、私と同様な地下水調査に携わり、顔を合わせた時に、仕事上の問題や悩みを話してくれることもあったが、その様な状況の下で、山への情熱を燃やし続けていたのだろう。

78年のジュティボフラニ峰、ニルギリ南峰の遠征も初登頂という成果をあげて終了し、80年にガネッシュ・ヒマールⅢ峰遠征計画も具体化し、福島君も隊員として参加する事となった。出発準備に忙しい80年の元旦、新井隊長、中田君と共に拙宅を訪ねてくれた事を思い出す。

今、私の手許に通の年賀状がある。発信地はカトマンズ。

『謹賀新年 久しくご無沙汰し、申し訳ありません。(中略) 私の方は長野OBの加賀瀬さんを恐れ多くも“まかない夫”として下宿に引き入れ、また渡部夫妻も見えるそうで少しはにぎやかなお正月になる事でしょう。一時は体重が50kg近くまで落ちましたが、最近また取り戻し始め、幸いにして健康にしております。そして、先生になったり、土方になったり Singer になったりしながらたいくつせずにバタバタとくらししております。しかし、1年前の徹夜して図面や原稿用紙を前にして、進まぬ筆に泣いていたことも少しなつかしくもあります。やはり日本人なんでしょう。でも、あのままでいたらきっと胃カイヨウか、過労運転でつまらないことになっていたかと思うと、恐らく今こうしていただける自分が一生の内、最も幸せなのだろうとも思います。(後略)』

福島 拝 』

81年の正月、彼から頂戴した年賀状である。それから7ヶ月後、グランドジョラスで不帰の客となってしまった。それにしても、幸せは余りにも短かった。もっと山に、人生に、活躍して欲しかったと思う。志し半ばにして山に逝った福島渉君の霊、安からんことを心から祈ります。

以上

追悼 服部崇さん、小滝顕也さん

1990年3月8日、中央アルプス松尾岳松尾尾根、標高2,530m付近にて雪崩で遭難

遭難報告から抜粋

事故概要

3月8日、快晴

6:30 松尾尾根取り付き。2100m付近から風が強くなり地吹雪となる。

13:40 長谷川、服部、小滝、植垣の順で登っていた。服部がトップに立った直後、数メートル上で、幅約40m、厚さ約1mに斜面が切れ、表層雪崩が発生。

長谷川は、2～3m流されてから安定した場所に逃げる。

植垣は斜面を40m程流されて止まる。(木に引っ掛かって止まった)

服部、小滝は雪崩に巻き込まれ、そのままルンゼの下まで流された。

翌日、ゾンデにより二人の遺体を発見。収容した。

夢多かりし若者の死を悔やむ

顧問 山田哲雄

ある程度歳をとった人が亡くなったときには、たとえ病気でなかったとしても、御寿命だったんだなーとあきらめがつくように思う。

しかし、若い人が、特に遭難とか事故とかで亡くなると、本当にもったげなかったとか、悔しいと思う。もちろん友達同士であったとか、先輩、後輩の間がらとか、身内とか、故人と生前どのように関わっていたかによって感情は違うはずである。

私自身が若かった頃に、山の遭難で亡くなった友は、弟のような年恰好であった。ふだんよく酒を飲みに来た君が山で逝ってしまったときには、残った仲間たちと、泣きながら酒を飲んで悔やんだこともあった。いつ来ても、部屋の隅のほうでおとなしくしていた君が逝ったときには、もっとやさしく語りかけて彼の話聞いておくべきだったと悔やんだものである。

今春、服部君と小滝君が遭難したらしいと報せを受けたときに、トッサに二人の顔を思い出そうという前に、「私の倅と同じ年頃の二人が」という感情が先だった。

近年、私自身がズクがなくなって、現役の人たちと酒を飲む機会ももたなかったので、研究室へ来てくれたときに話をしたり、OB会で一緒になるぐらいであったから、「倅と同じ年の若者だ」という感覚は、私にとって強いショックだった。

服部君のお母様や、小滝君のお父様からのお手紙を見ると「あれを食べさせてやりたかった」「あの喜

びを聞いておきたかった」わが息子が、彼自身の夢を果たすことなく突然亡くなってしまった親たちの悲しみと無念さが、私自身の現実に重なってくるように思われるのである。20年前に逝った友の両親の悲しみは、あの時は分かったようなつもりだったが、今にしてみればこんな風だったろうかと思われる。

岳友を失った仲間の悲しみと、ちょっと違った立場から、私は服部崇君と小滝顕也君の死をかみしめている。

仲間の死に立ち会って

浦山大介

「コタキー」、上部を捜索に行った植垣の絶叫する声が聞こえた。瞬間背筋がゾクリとし、トランシーバーから「9時8分小滝さん発見」の報、そして「遺体です」と続く。目の前が暗くなり、全身の血液が瞬時に沸き立つ感じがした。ああコタッキイが死んだのか。

ゾンデ棒は相変わらず手応えがない。願わくばこのまま空振りが続き、せめてハットリだけでも「アレー、お前らそこで何してんの？」とおどけてどこからか姿を現してほしい。しかしその願いも虚しく、やがてゾンデ棒は一ヶ所に集まり、「間違いないこれだ」と遭対協の人の声。

雪の蒲団を取り払い、大きな雪のベットに2人を並べて寝かせると、様々な思いが走馬灯のごとく駆け巡る。服部よ、小滝よ冷たかっただろう、寂しかっただろう。だけど今の俺には、一緒に山を下りてやるくらいしかお前らにしてやれ無い。下を向いていると涙が出そうだから上を向いたがやはり涙は出そうになる。空には雲一つ無く、3月上旬だというのに山はまるで真夏のように暑かった。

ヘリコプターから見える景色は、山から町へと変わり人々の待つ駒ヶ根のグラウンドへと移る。残された家族の深い悲しみに触れるまで人の死がかくも壮絶なものであろうとは思ってもよらなかった。「まるで眠っているようでした。」これだけ言うのが精一杯で、後は只黙って頭を下げた。そして下で雑務に当たっていてくれた仲間に出会「ゴクろうさん」と言われると、彼らも捜索に加わりたかっただろう事を思い胸が締め付けられるようだった。

病院へ行き、白木の箱に入れられた服部と小滝を前にして、ようやく個人に戻ることができた。張りつめていた糸は断ち切れ、感情のなすままに声を張り上げて泣いた。服部と酒を飲むことも、小滝の笑顔を見ることがもはやかなわぬのか。かけがえのない仲間をなくしたことが悲しくて泣いた。志なかばで死んでいったことが切なくて泣いた。好きな山で死んだことが悔しくて泣いた。止めどもなく涙は溢れ、枯れるまで唯々泣いた。病院からは山がよく見える。何故だ、何故山が裏切る。山が好きで登っていた2人の命を何故。山を睨み、この時始めて心の底から山が憎く思えた。

植垣健太郎

小滝の髪がさらさらと揺れていたのが忘れられない。両手を大きく広げ、真っ青な空を仰いでいた。そばに無惨に割れたヘルメットが落ちていた。茫然と立ちすくむ私の前で遭対協の隊員がそれを拾い、小滝の顔にそっとのせた。ポカポカと暖かい1日だった。

私の体がようやく停止し、雪の上に立ち上がった時にも2人は大量の雪とともに落下を続けていた。樹の間をすり抜け、幾段もの滝を飛びつつ墜ちてゆく2人の姿を思い、不安、恐怖を想うとき、涙が止まらない。

服部さん、小滝、もう一度、たった一度でいいから会いたい。酒を呑みながら話をしたい。一緒に岩を

登り、雪の山を歩きたい。

でもそれは叶わぬことだ。死から生へはどうしても動かせない。

私は人が死ぬと、命は消えて無くなってしまふものと思っていた。しかし2人が逝ってしまったから、それが間違いであることが分かった。あんなに大きくてあたたかな生命が「死」によって泡のごとく消え去るなどとは不合理なことだ。

私たちは生死の問題についてもっとつきつめて考えてみるべきではないだろうか。登山という常にくらかの「死」の伴う行為をこれからも続けていく以上、この問題を避けることはできない。私達にできることは、彼らの死を無駄にせず、彼らの分まで（単に長く生きるということだけでなく）生きてゆくことだと思う。逝ってしまった二人もそう望んでいるだろう。

ぽかぽかした暖かい日にはよく、服部さんと小滝のことを思い出す。あの春の日の激情は今ももう無いけれど、時折り、耐え難いような寂寥を感じる。

合掌。

「迷った時には引き返す」—二侯の思い出

1992年10月2日、カラコルム、クラウン峰にて遭難

師田 信人

二侯勇司：享年 37 才

二侯の思い出を僕が書くことについては必ずしも適役とはいえないかもしれない。二侯とは同期の入学で、数少なかった松本部員として現役時代を過ごしたことの他には、僕以上に山行をともにしたり寮での



●新人合宿 北尾根5・6の科尔にて



●新人合宿 屏風の頭にて



●池ノ平山偵察山行



●インゼル上でバランスをとる二俣勇司君

生活を楽しんだりした人間はいくらでもいると思う。ただ、ヒマラヤと一緒に行くことはなかったものの節目節目の山行を伴にしたり、4年生の時には実質的に2人だけとなった最上級生として共に些かなりと、山岳会の伝統といえるものがあるとすればそういったものに寄与し、二人にしかわからない苦勞を分かち合ったという点では許されてもいいか、とも思っている。

前書きが長くなった。僕らが信州大学山岳会に入った時、伊那松本の新入部員は15名あまり、長野、上田も入れると新人合宿に参加した一年目は20名近くだった。二俣は体も小さく目立つ存在ではなかったが、酒だけは強くとにかくばてない奴だった。合宿や個人山行の季節が過ぎるたびに一人抜け、二人抜け、3年の冬合宿に参加したのは医進2年の時に医学部スキー山岳部から移ってきた藤元と合わせた3人だけになっていた。その藤元も4年目には勉強が忙しくなり合宿も満足に参加できなくなり、酒を飲むと「結局俺たち二人だけになっちゃったな」「まさかお前と一緒になるなんて思わなんだ」「お互い様」のような悪態をつきあっていた。思い出す山行は少なくない。2年のSTからのジャンダルム飛騨尾根T1フランケで落石落とされ死ぬかと思ったこと（二俣の追悼文集にこのエピソードは書いた）、3年の夏、三の窓に5人で定着してチンネ、池ノ谷を登りまくった後、東大谷左俣を下降する予定が誤って左の左俣に迷い込み、ずたずたの雪渓を文字通り命からがらで下降したこと、そして4年の時の厳冬期黒部横断（'77年度冬合宿の項、参照）。慎重で気弱なことを口にしても終わってみればやるべきことは必ずこなす実力派、というのが僕の二俣観になっている。

「迷った時には引き返す」という彼の言葉が今でも耳に浮かぶが、言葉通りに受け取ると彼を誤解する。ぶつぶつ文句言っている、本番ではどんな状況でも登るべきところは登り、そして安全圏に到達すると「お前のおかげで今日はエライ目にあった」とか又ぶつぶつ言い出すのが常だった。一見、臆病とも思われるようなことを平気で口にできるところが、彼の一番の強さだったのかもしれない。そして、本当の意味で頭の切れる人間だったと思う。何の山行だったか今となっては思い出せないが、食料切り詰めてみんな空腹感に苛まされていた時、冗談半分に「お前、体小さいんだから食べるの少なくていいだろう」と言ったら、本気で怒って「そんなこと言うなら担ぐ量も体重割りにしろ」とすかさず切り返され、返す言葉がなかったことがある。

大学を二人とも普通の学生より余計な時間かけて卒業するまでの7年間は一緒だったが、学生生活を終えた僕は山から遠くなり、二俣はいつの頃からか尖鋭化した登攀を目指すようになっていた。学生時代の二俣と何かギャップを感じることもあったけど、年賀状でみる二俣は昔の二俣のままだった。遭難とは一番縁遠いところにいたはずなのに、風雪の中で雪崩に巻き込まれたとは、彼の責任感がなした結果としか

考えられない。考えてみれば、僕を初めて穂高の岩場に連れて行ってくれた2年上級の福島さん('81年夏、グランドジョラス北壁で遭難)も学生時代はクライマー、というイメージにはそぐわない人だった。冥福を祈るのみである。

一応、科学の先端(?)に近い分野に身を置く立場にあるが、卒業後20年近く、夜は山の夢にうなされていた。多くは難しい岩場や氷壁の前でにっちもさっちもいなくなったり、あげく落っこったり、というやつである。数年前に岡山での学会中に時間を見つけて今治にある二俣のお墓参りをしてきた。当時働いていた新潟の酒をかけてきただけだが、その後あたりからほとんど山の夢を見ることがなくなった。東京に出てきて仕事が厳しくなったせいかもしれない。でも、僕はお墓参りのおかげ、と信じている。二俣の追悼文集はいつも机の上に置いてある。疲れた時に何気なく開くと、昔のままの二俣がいる。味気ない東京の生活の中で一瞬、昔の自分に戻れる時間でもある。

注：事故概要

昭和49年(1974年)入学の二俣勇司君は、7年部員(1980年)のときにガネッシュⅢ峰への信州大学学士山岳会隊の一員として参加し、山岳部卒業後、1988年インドのリモI峰、1989年マッキンリー、1989年エベレスト、1990年中国のクラウン峰、1991年マカルー峰等の海外登山を経て、1992年日本ヒマラヤ協会隊(HAJ隊)の一員として中国のクラウン峰を目指した。再度の挑戦だった。7月14日に日本から北京に向かい、まずはムスターグ・アタの6900mに到達した後、8月28日にクラウン峰BCに入った。そして、9月22日に最終の第5キャンプ(6500m)を建設した後に下位のキャンプで一旦休養し、10月2日に頂上アタックのために二俣・中川パーティが上部キャンプに向かった。その途中、第3キャンプ(5100m)から第4キャンプ(5800m)に向けて固定ロープに沿って2番手で移動中、二俣君は上からの雪崩の直撃を受け、雪崩と共に流されて行方不明となった。その後の捜索で彼のアイスバイル等は発見されたが、二俣君自身の発見には至らなかった。

「じゃあ、またな 二俣勇司 追悼文集一」(非売品)に詳細が掲載されている。

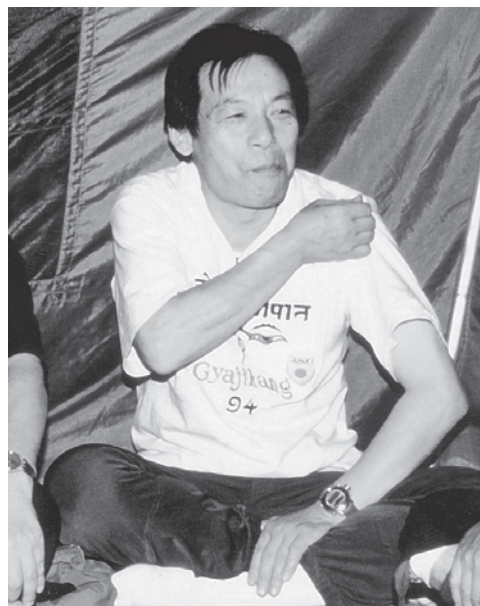
御子柴さんの追悼

1997年9月27日、アイサワ谷で遭難

草野徳光

私が信州大学山岳部に入学した時、寺沢さんは三つ上の四年生でした。夏合宿が終わってすぐに退部してしまったので、在部中では寺沢さんと山行らしい山行はできませんでした。一つだけ覚えていることは、サマーテントで居候していた時、当時の受験案内誌“蛍雪時代”の表紙に信州大学山岳部の雄姿をのせたいと依頼があり、寺沢さんと私、そして同期の栗田君との3人で涸沢まで撮影に出かけました。前穂の三・四の科尔に突き上げる雪渓を背景にした我々の雄姿はなかなかのものでしたが、何月号だったのか、残念ながら今は手元にありません。その時の報酬は確か涸沢ヒュッテのラーメン一杯でした。

農学部のある伊那に移ったときは、もう寺沢さんは卒業で「国土防災」に就職されていました。でもチョコクチョコ砂防の研究室で会ったような記憶があります。そんな寺沢さんから「アルバイトをせーへんか」と誘いがありました。内容は砂防の調査の助手ということで、寺沢さんについて沢登りをすれば良いだけです。「ももせ」の天カスが天井の山岳部でしたから、旅館の食事で、しかも晩酌付、断れるわけがありません。今となっちはいったいどの沢を登ったのやら全然分かりませんが、北海道の沢に一月をかわきりに、奥只見、裏丹沢などにも行きました。寺沢さんは酒所新潟は柏崎の出身のせいかな、かなりの酒豪



でほとんど毎日が酒盛でした。おかげでこちらは二日酔い。「クサノーッ、二日酔いなんてものは歩いて汗を流せばなおるんヤーッ」とよく叱られました。そんな寺沢さんは休憩になると必ず5万分の一地図を広げます。地図を片手に山を眺めていた寺沢さんの姿が眼に浮かびます。商売柄か地図の読み取りは間違いが有りませんでした。その後の山行も道の無い所に行くときは、寺沢さんと一緒だととても安心でした。そして下山。手元にはガッポリとアルバイト料。寺沢さんは神様でした。

農学部の中原寮で一番えらくなった頃、すなわち私が四年生の時に寺沢さんが伊那に戻って来ました。もう一度砂防の研究室に戻って勉強するとか。その頃には私も酒は鍛えられていましたから、いわゆる「のん兵衛仲間」ができていました。寺沢さんも当然その仲間に加わり、以後は「寺沢さん」から「テラさん」になりました。怖い先輩はテラさん以外もういないので、中原寮の屋上でよく酒盛りをしました。甲斐駒、仙丈を眺めながらの酒は又格別です。よく飲んだ酒は仙醸、井の頭（ドタマ）、他々。

「酒は剣菱ヤデーッ」とテラさんが一斗樽を持ってきてくれたのを覚えています。そして夜になると伊那の町へ。「一平」、「小春」、「ヤナギ屋」などなど。一番よく行ったのは「ヤナギ屋」だったと思います。当時千円札一枚でコップ酒11杯が飲めてしかもお釣りが来ました。小皿の上にグラスを置き、なみなみと酒がこぼれてもまだ注ぎます。表面張力で盛り上がった酒をズッと吸い込み「ウメーッ」と言って、小皿にこぼれた酒をグラスに戻します。何より嬉しいのはコップ酒一杯に必ず一皿のつまみが付いていることです。タコ、シメ鯖、冷奴、枝豆なんか有ったかな。一つだけ不満だったのは、刺身がワサビではなくカラシでした。そしてしっかり酔っ払って、最後に行きつく所は「モスコー」です。飲み屋街のはずれに有る小さなバーです。テラさんは「モスコー」が好きでした。静かな落ち着いた雰囲気が入っていたのだと思います。マスターも奥さんもお達者でしょうか。今でも有るのなら又行ってみたい。

テラさんが天竜川に落ちたのもこの頃です。酔っ払って下宿に帰る途中、バランスの訓練とかで橋の欄干を歩いたそうです。そして5m下の河原へ。幸か不幸か落ちた所は河原の石の上で結果は全身打撲。痛々

しい青アザを見せてもらいました。良く打身で済んだものだと感心させられました。3日間位は寝込んでいたと記憶しています。しかし何と言ってもこの頃の最大重大事は、「テラさん」が「御子柴さん」になったことでした。我々の憧れのマドンナ、研究室の事務を勤めておられた御子柴さんと結婚してしまったのでした。「研究室に戻った目的はコレだったのでは」と、のん兵衛仲間で大ブーイング。

信大を卒業してから10年位はほとんど山登りをしませんでした。そんなある日、昭和56年前後です。当時名古屋の高蔵寺に住んでいたのですが近くの定光寺に岩登りのゲレンデが有って、そこでバツリ山岳部の後輩に出会いました。聞けばチョコチョコ山に登っているとか。他にも名古屋周辺には山岳部のOBが何人かいることがわかり、早速連絡を取って集まりました。これに、山岳部では無かったのですが山の好きな信大のOB、会社関係の山好きが加わり、O.C.C.（オールドクライマーズクラブ）を発足させたのであります。オーシーシーの意味は、「年を取ってもその年齢に応じたパイオニアワークを持って、いつまでも山に登り続けよう」と皆で決めてこの名前にしました。山行の内容は岩登り、沢登り、冬山、山スキー、家族ぐるみのキノコ狩りなど、何でも有りでした。

そんな頃、御子柴さんが名古屋支店に転勤になってきたので、早速会に加入してもらいました。御子柴さんが最初に参加してくれた山行は、5月の劔岳でした。本隊は小窓尾根を登り三ノ窓でテントを張っています。すると池の谷雪渓を単独で登って来る人がいます。あれは御子柴さんに違いないと「アーラヨッ」と叫びます。すると「アーラヨッ」が帰って来ました。近付くにつれて姿格好がはっきりしてきます。タオルを頭に被り、派手な色は決してないジミーな服装、やはり御子柴さんでした。翌日は劔岳往復、御子柴さんは雪山が得意で、この時はトレースをわざと外して自分の足跡をしっかりと山に刻んでいたのを覚えています。又御子柴さんは焚火が大好きで、帰りに白萩川を渡渉した時などもすぐに焚火を始め、皆で暖を取ったりしました。翌々年の同じ5月の連休に通称「猫の耳」で知られる赤沢岳西稜を登ったときも、針ノ木の雪渓で御子柴さんが焚火をしてくれました。雪上での焚火など私は思いもしなかったし、その事も忘れていたのですが、その時の事は仲間の心に深く残っていました。

その後もO.C.C.は、ヒマラヤ経験を持つ信大山岳部のOBが参加してくれたりして、活動内容はかなりハイレベルだったと思います。ここに御子柴さんが参加してくれた山行を、他にも有るはずですが、分かる範囲で記しておきます（鈴木忠君のノートより）。

昭和57年4月、劔岳、3泊4日。

昭和58年1月、西穂高～槍ヶ岳縦走、5泊6日。

昭和59年5月、赤沢岳西稜、5泊6日。

昭和62年9月、白山、犀川イワナ釣り、2泊3日。

平成3年5月、スバリ岳中央稜他、5泊6日。

平成になって私は実家のある伊豆の伊東へ引越しました。名古屋の山仲間とも疎遠になり、山は本当に遠い存在になっていました。そんなある日御子柴さんから電話が有り「イワナ釣りに行かへんかー」と誘いがありました。嬉しくて嬉しくて二つ返事でOK。場所は大井川の東又でした。若い頃は岩登り主体の山行でしたが30才を過ぎてからは「釣り竿片手に沢登り」に変わったのです。エサはたいがいミミズを持っ



●岩魚釣りを楽しむ御子柴さん

て行きます。ですが御子柴さんはほとんど川虫を取ってエサにしていました。川虫の取り方も御子柴さんに教わりました。釣りの腕はというと、最初の頃はやはり経験で御子柴さんの方が上、でもこの頃になるとトントンか。大井川での結果は、イワナ 20 匹位だったと思います。2泊3日だったか3泊したのかは忘れましたが、林道がやけに長かった。久しぶりの山行でバテバテでした。その後もイワナ釣り山行を計画したのですが、仕事の都合等でなかなか実現しませんでした。

御子柴さんと最後の山行をしたのは、青海川のアイサワ谷でした。御子柴さんが亡くなられた年である平成9年の7月だったと思いますが、二人でイワナ釣り山行に行きました。青海川は朝日岳の北にある犬ヶ岳に源を発して、新潟県は糸魚川の隣、青海で日本海に注ぐ川です。なぜこの川を選んだかと言うと、入口からかなり長いゴルジュが続き、ザイルを持たない普通の釣り人では遡行が難しいからです。御子柴さんは地図についているゴルジュのマークを、「毛虫がついてる」と言い、こういった沢は魚影が濃く、沢山のイワナを期待できるのです。高巻道もあるみたいでしたが、この時はかなり忠実に本流をたどりました。泳いだり、へつったり、滝に出くわして急な草付きをズリ落ちそうになりながら高巻いたり、懸垂下降したり。

やっとの思いでゴルジュ帯を抜けた時はもう一日も終わり頃、ゴルジュの中では竿を出す余裕はほとんど有りませんでしたので、早速夕飯のイワナ釣り。やはり期待どおりの沢で、アツという間に10匹以上は釣り上げました。後は焚火の準備です。御子柴さんの焚火は、中途半端はダメです。とにかく集められるタキギは全部集め、最初は「天をも焦げよ」とばかり豪快に燃やします。釣ったイワナを串に刺して焚火の回りに並べます。遠からず近からず。そして自分の居場所を心地良く改め、いつでも横になれる体勢で乾杯。この一杯の為なら酒の重さは全然苦になりません。焚火の火とジワジワと焼きあがっていくイワナを見つめながら酒を片手に山語り。至福の一刻。

時々手を伸ばしてはイワナをガブリ、そのうち酔いがまわってきて、焚火の火もだんだん下火になり、やがて一日の終わり。翌日は空身でイワナ止めまで遡行し、釣りを十分楽しみました。アイサワ谷の上部は開けた谷で滝らしい滝もほとんど無く、釣りには持って来いの沢でした。どのポイントにもたいがいイワナがひそんでいます。尺以上はあまり釣れませんでした。25cm前後がかなりの数で釣れました。沢山釣れた時はイワナの喉の塩からを作ります。イワナの喉から胃の部分を切り取り、ナイフの脊でしごいて内容物を取り除き、細かく切って塩に漬けます。多少何かが残っていても決して洗いません。それが微妙な味を作るのです。食べ頃は下山して3～5日位か。美味、珍味、希少価値。

2日目の夜も前日と同じ。違うことは食べきれないイワナを焼きガラシにすることです。この方法も御子柴さんに教わりました。遠火でジックリと時間を掛けて焼くとイワナの油が鼻先からポタポタッと落ち始めます。酒をチビチビ舐めながら辛抱強く最後の一滴が落ちるのを待ち、それから一呼吸置いて完成です。燻製とはチョット違いますが、一味違った保存食ができあがるのです。冷めても美味。

アイサワ谷はいい沢です。御子柴さんも気に入っていました。今度来る時は、下部のゴルジュ帯突破にはかなり苦労したので、高巻ルートで入って、イワナ釣りだけ楽しもうか、などと話していました。

夏が過ぎ、イワナ釣りシーズンもそろそろ終わる9月に入って、御子柴さんから電話が有りました。「アイサワ谷に行かへんか」と誘いの電話でした。この時の私は仕事の都合でどうしても休めませんでした。そして、一人で出かけた御子柴さんは帰らぬ人となってしまいました。あの時、何が何でも一緒に行けば良かった。ヒョットしたら違った結果になっていたのではと思うと胸が締め付けられます。残念で残念でなりません。

そんな思いで遭難の捜索に又アイサワ谷に入りましたが、それを最後にその後はもう山らしい山へは入っていません。

でも、もう一度アイサワ谷に入りたい。必ず行こうと思っています。OCCだから。

事故概要

小根田一郎

御子柴三男氏の姓は、ご結婚により旧姓「寺沢」から「御子柴」に変えられたものである。「寺さん」こと寺沢氏は昭和44年3月に学部を卒業し、昭和47年に大学院に入り直した。そして、大学院を修了して会社に戻られた後に結婚されて、姓を「寺沢」から「御子柴」に変えられた。

平成9年(1997年)9月29日(月)、所長である御子柴氏が出社せず単身赴任中の住まいにもいないことを不審に思った勤務先の社員から親交のあった山岳会OBに行方不明の一報が入った。それを起点として、おそらくは岩魚釣りに入渓したであろう、入渓のために林道奥に自家用車を止めているであろう、との前提の下に、数カ所の入渓先を想定し、その想定入渓先を手分けして確認する探索が開始された。御子

柴氏は岩魚釣りにかけてはプロの域に達し、その入渓先も本格的な沢登りの対象となるような沢であった。新潟県から長野県に跨る広範囲の地域内を車を飛ばし、それぞれの沢に沿って林道奥までの探索が手分けして行われた。その結果、新潟県の糸魚川付近で日本海に注ぎ込む「アイサワ谷」の林道奥に御子柴さんの自家用車があることを発見した。この車の発見により、岩魚釣りで入渓し、何らかの事故に遭い戻れない状況にある、すなわち「遭難」と判断された。山岳会 OB・現役、糸魚川警察、同消防署の他、御子柴氏が所属する会社の上司や同僚を含み、又、最大2台のヘリを含んで、大規模な搜索が一週間に亘り連続して行われた。しかし、単独で入渓したこと、アイサワ谷は厳しいゴルジュ、腰を超す深さの徒渉、困難な高巻きというように岩登りを含む厳しい沢であること、沢にいるのか高巻き途中の山中にいるのかの場所が絞り切れないこと、「すだれ作戦」というように沢の崖に数 m 間隔でロープを垂らしアプザイレンにて探っても手がかりが得られないこと、等から搜索を中断せざるを得なくなった。

中断したその週の10月9日の夜から11日まで、名古屋の OCC（オールドクライマーズクラブ）のメンバーが独自に搜索のためにアイサワ谷に入った。この OCC は、山岳会を中途退部した後も山に登っていた名古屋在住者、信大卒業生、山岳会 OB、それらの周辺の者達が集まって設立されたクラブであり、御子柴さんも名古屋在住時代にこれに加わって活動していたものであった。この週末あたりが、さしもの強靱な御子柴さんでも生存可能限界であろうとの切迫感を OCC のメンバー達が抱いていたからであった。この搜索により、御子柴氏の雨具（上）、スポーツシャツ、ロープ等が沢内に点在している状態で発見された。これにより、御子柴氏は沢内に浸かっているであろうこと、沢内であれば生存は絶望的であること、を認めざるを得ない状況となった。そして、その翌週の10月18日・19日に、今度は山岳会 OB・現役が入渓し、最後の最後の段階で、ある OB の超人的な識別力により、流木に絡まって水中に没した状態の御子柴氏が発見された。

御子柴氏は、それまでもアイサワ谷に単独でも幾度か入渓した経験を持つ。しかし、それは、下流域の沢通しの通過が単独では危険を伴うため、高巻きルートを通ってであった。遭難から遡ること二ヶ月ほど前に、御子柴氏は昔からの相棒と二人でアイサワ谷に岩魚釣りのために入渓した。伊那・松本山岳部を途中で退部し信大 RCC を設立し、卒業後は上記の OCC の一員であって遺留品の発見者でもある後輩の K 氏とであった。そのときは K 氏の先導でアイサワ谷の下流域を沢通しで上流域まで遡行した。そして、岩魚釣りシーズン終了前の9月に再びアイサワ谷に入られて、難に遭われた。

御子柴三男君 追悼

扇 能 清

1991年12月初め、大阪勤務であった御子柴から、話があるので飲もうと誘いがあった。

話しとは、82年以来しばらく遠ざかっている、信大のヒマラヤ遠征隊を出そう。若手 OB は他山岳会の隊に加わり力をつけており、現役にもその経験を伝えてゆこうというものであった。

それには、生活の中で、第一は仕事とするが、第二はヒマラヤ遠征というほどの、覚悟があれば可能である。長丁場になるので3人は必要である、小川勝さんを巻き込んでやろうということになった。

そんな話の後、すぐに彼は「ヒマラヤへ行こう会」と名付けた会の案内を出した。日時は1992年正月、



●ネパールトレッキングに行く飛行機内で

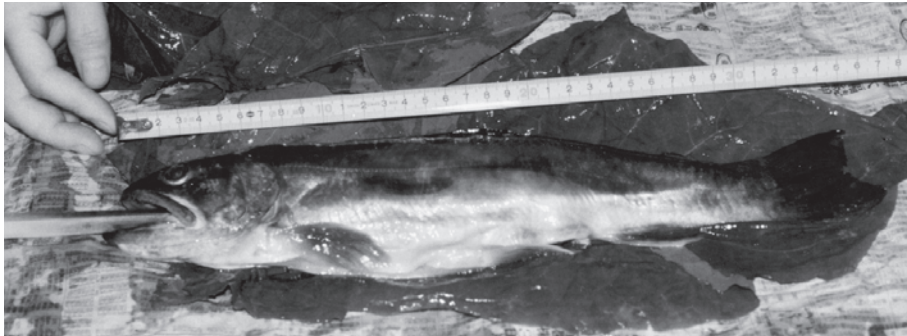
場所は建ったばかりの穂高山荘。その後数回の準備会を経て、ギャジカン、ラトナチュリ、ガネッシュへと続く実行委員会の始まりとなった。

それから数年の間、月に一回ほどの割合で週末や連休に信州へ通い、実行委員会に出席した。その前後の夜には穂高山荘に集り、実行委員の皆と大いに語りよく飲んだ。

彼は溪流釣りを兼ねて来ることも多く、釣った岩魚や山菜、そして日本海の幸を買って、持って来ることもよくあった。それでまた、大いに酒の席が盛り上がった。

卒業して20年、新たな旧交？ の中で、

- ・いつも囲炉裏の火の世話をしながら、遅くまで飲んでいて、焚火が好きで火を見ていると落ち着くと言って、それでいて、「早く寝て、早く起きよう、でないと生活のペースが狂う」彼の意外な言葉に驚いた。最後まで飲んでいるのは誰だ。
- ・北陸でタラと酒粕を買ってきて、酒粕仕立てのタラ汁を造るという。皆でタラ汁はスマシだと言って、彼の曖昧な了解を得てご馳走になり、たいへん満足した。
後になって知ったが、新潟では酒粕仕立てにするとのこと、彼の懐かしい味を奪ってしまい、申し訳なく思った次第。
- ・71年の再挑戦、当初目標としたアンナブルナⅡ峰北稜、その偵察隊が持ち帰ったスライドを見て、ルートのアマリの難しさに重苦しい雰囲気になっていた。
そこに二侯勇司君の遭難の第一報、沈痛な空気が変わり一同沈黙の中、彼は「こんな時は、酒でも飲むしかない」とヤカンに燗をして注いで回っていた。それで少しだけ気持ちが落ち着いた。
- ・急逝された支店長の後を任せ、ストレスの多い日が続いたのであろう。「見てくれ十円ハゲが出来た」と髪をあげて見せていた。次に会ったとき、「岩魚釣りに行ったら毛が生えてきた」
- ・「岩魚釣りは下手だから、人の入ってない所へ行かなければ釣れない」
「燻製も10年くらい経って、ようやくうまく造れるようになった」
- ・広島大学へ進学し、ヨット部で活動している長男の下宿を訪れ、生活ぶりをみて、「息子も俺たちの学生時代と同じように、楽しくやっている、安心した」と嬉しそうに満足気であった。
- ・ラトナチュリ遠征の学生隊員、出発直前の夜、父君が脳内出血のため倒れた、急遽、関空より実家(山



梨だったか)へ帰り、それほど心配することもなく、後発隊と共に出発した。

その後、彼の実家へ行き父君を見舞ってきた、同じ親として、いろいろ話すことがあったのだろう。自分の楽しかった青春を、一人でも多くの若い人達に経験してもらいたいと願い、援助を惜しまなかった。そして、信大山岳会が大好きなOBの一人であったと思う。

御子柴君の書き残した「秋溪行」社内誌の原稿のようである。1泊2日の釣行である。

「釣った魚は美味しく食べてやる義務がある」と言う、会得した燻製の作り方に関する部分を記しておこう。

早朝から午前中に釣った岩魚は「サッと一洗いし、鮮度を保つために、捌きにかかる。イワナの頭を向こう側に、腹を上にして左手に握り、腹部の下端にナイフの先端を切り込み、エラ下まで切り裂く。胃腸等の内臓が切り開いた腹部に覗く。右手の親指と人差指でグッと開き内臓を取り出し、血合をきれいにとリエラを抜いて、捌きが完了する」……

……「捌いた獲物は、もう一度水洗いし、塩を振り丹念にイタドリの葉に包み魚籠に収め、風通しの良い日陰に保管する。こうしておけば、鮮度の落ちやすいイワナも夕暮れの料理時まで十分に鮮度を保っている。また、取りだした内臓のうち、食道と胃袋をきれいに洗い、塩を振って大きなフキの葉に包んで、釣糸で縛り保存し、今夜のツマミとする」……

河原で一眠りして、午後から釣り始め3時頃にテン場を決め、草を刈り砂地に陽を当て乾かし、一抱えほどの流木を集めて広げてこれも乾かす、そして、午後に釣った岩魚を同様に捌き、朝の分と合わせてビニール袋に入れて流水に浸しておく。それからもう一度釣りに出かけ6時頃帰りツェルトを張りネグラをつくる。乾かした流木に火をつけ、串集めにかかる、この串集めが結構苦労するようである。

……「串に差し、焚火で焼き、燻製もどきの“焼き枯らし”を造るのである。燃え尽きそうになっている焚火に、流木を十分に継ぎ足し、イワナの刺さった串を一本、一本丁寧に、風向きを考え、イワナの背を焚火に向けて、倒れないように砂地に差すのである。

イワナの“焼き枯らし”と言うのは、串に差したイワナを、焦げ目を造らない様に、しかも十分に火を通し、3時間以上にわたって、じっくり干物の様に焼き上げた物である。味は、塩見が薄くのり、燻製の様にしつこくなく、適度に油が抜け、さっぱりとしている。身は、ポロポロと骨から離れて、食べ易く、長期間の保存に耐える。」……

……「串を差す位置は、風下を避け、イワナに焦げ目が出来なく、かつ十分に火が通るような、デリケートな位置でなければならない。」……「また今夜の酒の肴として、塩焼きにするため、4本は焚火に近



付けて焼く」……「串を差し終えたら、焚火の火力を調整し、これから3時間以上もの間焚火に使う流木を集めなければならない」…「流木を両手一杯運ぶ。3時間分の焚火に使う量は、4、5回にもなる」……

……「イワナの焼け具合を点検して、ようやく動き回る仕事を終え、焚火の縁に腰を降ろす頃は、真っ暗になり、狭い谷間の空に星が輝きだす。ビールの栓を抜き、昼に仕込んで置いたイワナの腑の塩辛を肴に一飲みし、紫煙をくゆらして落ちつく」……「労してここまで背負い上げた日本酒を出し、コッフェルに注いで、塩焼きを肴にチビリチビリやる」……「二匹目の塩焼きが、酒と共に胃の中に収まる頃を見計って、コッフェルに熱燗の酒を用意し、食べおいた二匹の骨と頭を、サッと焚火であぶり、コッフェルに入れ、熱燗の酒を注ぎ、特製の骨酒を造る。骨の甘味と塩味が酒に溶け込み、滑らかな感触で喉元を刺激し、胃の中に収まる」……

……「15分に一回くらいの間隔で、焚火の強さ、イワナの焼け具合を見て回らなければならないし、薪の追加や組み替えも適宜行わなければならない。イワナは、焼き始めてから30 - 40分すると、火が通り始め、魚体の水気が抜け出し、しばらくすると油が抜け始め、逆さまに串差しされたイワナの上顎から、ポタッ、ポタッと落ちてくる。それから20分もすると、油が抜けきり、背中部分が焼きあがる。背部が焼きあがると、串を反転させ、腹のほうを焚火に向け、腹部の焼きにかかる」……「腹側の焼き上げにも40 - 50分の時間がかかる。腹部が焼きあがると、こんどは、左右の側部を片方ずつ焼き上げる。片方の焼き上げに、30分ほどの時間がかかり、両面で概ね1時間を要する。仕上げに、再び背面を20分ほど焼いて完結である。焼き始めて3時間、労して集めた流木の殆どが灰になっている」……

……「焚火の中に径20cm、長さ2mほどの流木を2本入れ、明朝の残り火を確保する段取りをする。イワナの“焼き枯らし”もほぼ出来上がり、もう一度背を火に向け串を差し替えず」……

……「昨夜火に当てたままにして置いた“焼き枯らし”は、カラカラに乾いて焼きあがっている。」……「出来上がったイワナの“焼き枯らし”の串を抜く。串は、イワナが暖かいうちに抜かないと、魚肉にへバリ付き、抜けなくなるのである」……

この釣行で飲んだのは、缶ビール4本と日本酒1リットルであったようである。



●ネパールトレッキングのキャンプでご機嫌な小川・御子柴・奥嶋



●扇能山荘の囲炉で岩魚パーティー

病没・事故者

樋口清明さん思い出すまま

昭和 32 年文理学部卒 岡田 要

今こうして樋口さんの追悼文を書く羽目になろうとは全く想像もしなかった。と言うのも、亡くなる1ヶ月余前の2月末来宅し、松田町の河津桜と富士山の撮影に同行したばかりだからである。ここ数年彼は富士山の写真に執着しており箱根や伊豆へ案内した事もあったが、好天を狙って来ても彼が来ると不思議に曇り空となってしまった。今年はそうした事も無くマズマズ納得のいく写真が撮れて至極ご満悦の様子であった。また1週間前にも花や鳥の写真付きのハガキを貰った。それによると、長年続けて来た兄弟での島巡りに今年は4月に小豆島へ行く事にしたが、兄さんが80才を過ぎているのでいつまで続くやら？と兄さんの体力を心配していたのである。

樋口さんとの出会いは昭和28年私が信大文理学部に入学し、山岳部へ入部した時に始まる。彼は1年先輩で、その学年は松高山岳部を引き継いで信大山岳部を発足させた小松さんなど1期生と同じ釜の飯を食べた時期があり、部の歴史を最初から知っている貴重な存在であった。

その当時はまだ化学繊維が商品化される前で、装備たるやお粗末もいい所で雨に遭えば直ぐに滲みとおる綿のヤッケ、冬山で凍ると畳めなくなる綿のテント、軍靴を改造した靴、岩登りには地下足袋と決まっていた。大鍋や鋸、鉋は必携品であった。大きなキスリングは当時市内を走っていた電車の搭乗口が狭くて乗り降りが一苦勞であった。我々は皆ゲルピンで、松本は山へ行く交通費の点では恵まれていたが、それでも工面するのは大変だった。樋口さんとは下宿が近くよく行き来した。山行も部の合宿・個人を含め在学中一番多く行動を共にしたと思う。また小林国夫先生の構造土調査の手伝いに鉢伏山へ登った事もあった。

樋口さんとは卒業後もしばらくは年に1～2度同行した。5月の白山、2月の御岳山、正月の鳥取大山、この時は小林喜芳君も一緒だった。またこれも正月、安曇野から鍋冠山～大滝山を目指した事もあった。登山口の農家へ取り付き点を聞くために寄ったら丁度新年のお祝いをしている所で、お屠蘇を薦められ雑煮までご馳走になったのはいいが、ほろ酔い気分で輪カンをつけても予定通りに進める筈も無く、ずっと下でテントを張る事になった。結局この山行は鍋冠山の手前で断念引き返す事になってしまった。

私が再び彼と頻りに山行を共にするようになったのは、1985年彼が東京勤務となった時である。在東京5年間、彼は単身赴任をしていた事もありよく一緒に動いた。毛無山、櫛形山、茅ヶ岳、入笠山、妙義山など割合に名の知れた山へ行だったが、名古屋へ帰って話をしても誰もそんな山は知らなかったと苦情を言われた事もあった。彼が名古屋へ戻ってから年にも1～2度は一緒し、時には一等三角点巡りに付き合っ

て貰った事もあった。

樋口さんは中々の博識で田舎出の私など都会育ちの彼からは色々と教わる事も多かった。社交的で人懐っこい性格から級友、先輩、後輩、山での知り合いなど交際の範囲は随分広がった。文学的な蘊蓄もあり、最近では手紙の最後に俳句を付け加える癖があった。以前から道祖神へ強い関心を持っていたが、それが高じて石仏協会の会員になり会報に時々寄稿していた。花の名前にも詳しく、最近では鳥も写真の対象と

なっていた。カメラには金を惜しまず、デジカメを600万画素から1,000万画素の一眼レフに買い替えた
と見せびらかしていたばかりである。

彼の愛妻家ぶりは大変なもので、奥さんが入院中は付ききりで看病し、亡くなった後は月に一度は墓参
りを欠かした事が無く、いかに素晴らしい奥さんだったかが話の端々に滲み出ていたものだ。彼は何度か
禁酒はした事があったが、タバコだけは止められなかったようだ。いつかタバコを止めたらと意見をした
ら、余計な干渉をするなど大変な剣幕で怒り喧嘩になりそうなのでそれからは言わないようにしたが、最
近は気に入った景色の所へくると、葬式用の写真を撮りたいのでシャッターを押してくれと何度か頼まれ
た事がある。縁起でもないから止めたらと言いたかったが、また喧嘩になりそうなので黙って言いなり
になっていた。



●伊吹山7合目にて 平成17年3月 左 岡田さん 右 樋口さん



●一等三角点を巡り、和歌山県白浜付近の平草原にて
左から二人目が樋口さん、右側が岡田さん

昨年肝臓がんを宣告され、酒が飲めないからと貰い物の酒を送ってくれた事もあった。私も心配していたが、まさかこんな死に方をするとはい。

樋口さん、愛する奥さんの許へ行く事になってしまったからには、せいぜい二人で水入らずの楽しい時を過ぎて下さい。そして今暫くは我々を呼び寄せようなどとは考えないで下さい。これが長年付き合ってきた私の願いです。 ご冥福をお祈りします。

樋口さんは報告 No.2 発刊を楽しみにしていた 2007 年 4 月 5 日岐阜県可児市の鳩吹山（330m）の山頂で心筋梗塞により死亡された。

小林喜芳さんの思い出

中村和夫

山岳部在籍 8 年の彼との出会いは、彼が 6 年生で、もうリーダーも経験しておられました。私が入部する為 思誠寮南寮 20 号を訪ねると「オー」と返事のみ。狭い部屋には誰もおらず おもむろに押し入れの狭い 3 階から降りてきました。それ以来、同じ会社に勤務する事になり 50 年近いお付き合いとなり又私の人生の師匠として節目節目で大変お世話になりました。

当時 山岳部では遭難が重なり部員の数も減ってきておりました。

彼の時代、昭和 31 年秋文理山岳部はまず医学部と合併して松本を創設そして合併を前提にしての 35 年春の上高地合宿では 50 人余の大所帯で徳本峠を越え、それはにぎやかな楽しい合宿になったものでした。（小林さんが顧問・坂本さんがリーダー）ここに伊那松本山岳部が誕生しました。これは小林喜芳氏の功績だと思えます。部員 3 人の現在とは隔世の感があります。

その年の秋、学校側から「ヒュッテ」建設の意向が示され、乗鞍・鈴蘭高原を彼と伊藤国啓氏（翌年 3 月遭難死）私、学校側とで場所さがしに行きました。それが現在の信大ヒュッテです。

その 36 年春の前穂高・吊り尾根での遭難で仲間二人を失い、部としてもかなりのショックをうけ小林



●中京支部 OB 会の笠ヶ岳合宿にて 前列右側が小林喜芳さん



●報告 No.2 の発行を楽しみに、昔の写真を整理中の小林先輩（中央）。この後、4 週間で逝去された。
左、小原さん、右、坂本さん。

さんを中心にして対策に力をそそぎ「遭難報告書」を出しました。そしてそれを機に部報を出そうと云う事になり、古い資料をあさり遂に「報告 No.1」の発刊にいたりました。しかし部にはカネがなく、小林さんの顔の古さを利用して部以外の人を含め諸先輩から寄付を頂いた事を思い出します。

その頃でしょうか。松高山岳部の先輩から「空襲にそなえ校舎正面の右側廊下の下に山岳部資料が隠してあるので送れ」と。二人で捜し出し、一部急いで読み送った事がありました。今ならコピーをと残念です。

昭和37年春卒業を目前にした頃「婚約披露パーティー」をやりたいので「お前幹事と司会をやってくれ」と云われ、猿橋さん・小林実さんと駅前・タツミ亭で先生・先輩・寮生等と盛大に陽子夫人との婚約を祝いました。これが6月の徳川夢声氏の「テレビ結婚式」へと繋がって行くのでしょうか。

彼の早過ぎた人生も全て「彼流」のなせるものだったのでしょうか。平成17年9月「報告」の資料をつくるべく、彼と、山行を伴にした坂本正邦氏、小原武氏と私の四人で記録・写真の整理を2日にわたって行いました。

それからわずか4週間後、帰らぬ人になるとはその時思いもしませんでした。

人生を自分流で最後まで貫いた悔いのない一生だったのではと思います。

水野久人君、そして正人君・岳人（タケト）君のこと

小原 武

「岳友の訃報の便り仰北斗」

平成5年1月 他界を知らず出した年賀状の返信に、鈴子夫人から届けられた手紙を一読、ベランダから深夜の夜空を仰いで、とっさにかんだ拙句である。

文面によれば、前年12月7日食道癌による急逝で、55年の生涯であった。

早速2月になって、小林喜芳さん、前山浩仲さん等思誠寮で暮らした仲間数人で相模原の住まいの仏前に香をあげるべく赴いたが、正人君という一人息子は既に社会人として親父の故郷である岐阜県恵那市の小学校教師として新所帯を営み、夫人一人が仏を守っておられた。

その折、仏前に小生と水野君との関わり、岐阜県と同郷であること、一浪二浪の入学生の多い中で二人は同じ現役若輩が信大の仲間入りし、思誠寮そして下宿で自炊して同じ釜の飯を喰い、山岳部に入って数多く山行を共にし、しかも専攻も同じ社会-法律であった事等を記した学生生活中の無二のボン友であった思い出を綴った「水野久人君と私-輝ける青春の日々-」なる拙文を仏前に供えて帰った。

数々の山行のエピソードを記したが、さすが、当然、夫人の目に留まるので、昭和33年秋の燕岳→表銀座→檜→上高地、総勢14人の縦走での、合戦小屋手前の坂道中途の幕営時、シュラフが一人分足りないで、水野、小原二人ダブルシュラフで同衾したが、朝方になって水野のチンポコが小生の尻の下にあり、寝返りを打つと彼のイチモツが折れそうな気がして、気の毒と思い、ごつごつするのを我慢して朝を迎えた思い出は書かなかった。

その年の秋、正人君から、予期せぬ手紙が拙宅に届けられた。小生が書いた「……輝ける青春の日々」に触発されて父の歩いた山道の一部でも追体験しようと、「何が人を山に引きつけるのか」を求めて、

上高地から西穂高独標まで単独行をして帰宅したところとの文面で、落葉松の紅葉の舞う山道、稜線に辿り着いて眼前にひらけた穂高の峰々の素晴らしい景観、そして生まれたばかりの自分の息子（久人君の孫）に岳人（タケト）と名づけたこと等が綴られた心温まる手紙であった。

実を言えば、水野君とは卒業後東京と名古屋にそれぞれ職を得て別れて以来あまり数多く会っていない。昭和51年東京勤務になった折、16年ぶりに再会し、渋谷で学生時代下宿の自炊でよく食べた鯨料理をご馳走してくれた事。その後再度名古屋に住まいを移してから、偶然名古屋駅のトイレで隣合って、用をたし「ヤア」と声を掛け合い「一生臭い仲だ」と云って別れた事。平成になって11年水野君が金沢の子会社へ転勤在籍中、小生が出張で北陸に赴いた際、お互い多忙につき駅頭から電話で近況をやりとりし顔を合わせることなく名古屋に帰宅してしまった事もあった。

この様に卒業時別れて以来ゆっくり会ったことがなく、ましてや山行を共にすること無くあの世とこの世に別れてしまったことが、今になって悔まれる。

恐らく、子息を郷里に就職させたのも、自分がリタイア後郷里で、小生と山歩きをしようと思っていたのではないかと勝手に想像を逞しくすると切なくなる。

しかしその後正人君が恵那市から相模原の母上の処へ転居した旨の通知があった。

水野君も子息に正人君を得、手紙の文面によれば親父の辿った山道を追体験し、恐らく今は不惑の齢に達し、人生をしっかりと歩いているであろうし、孫の岳人君は祖父から引き継いだであろう名前で中学生に成長して、これからどんな人生を旅することかと想像してみるにつけ、人と人との出会いの妙に想いを馳せるのである。



●小槍頂上にて 右端・水野久人さん

窪田文夫さんの思いで

松尾武久

私が伊那・松本山岳部に入部したときは、窪田さんは既にOBで、信濃毎日新聞社に勤務されていました。毎年11月に行われるOB会には、必ず出席して頂いたように思います。一緒に山行したのは、私が4年生のリーダーのとき、夏の奥又白合宿に参加され、中又白を廻行したときでした。松高尾根を下り、ブッ

シュの中を中又白に着き、一番下の滝のところから、登り始めて、それまでは快調に登っておられたのですが、段々高度が増してきて、中盤のスラブ滝をフリクションを効かせて登るようになったとき、「アンザイレンしよう」と云われ、私とザイルを組みました。「しっかり確保してくれ！」といわれ、懸命に確保したことを思い出します。最後の草付を登り、池にたどり着いたとき、ガッチリと握手し「有難う」と言われた手の暖かさが忘れられません。

それからは、文理学部の後輩でもあったからでしょうか、必ずOB会では声を掛けていただきました。先輩だからといって威張ることなく、眼鏡の奥からいつも暖かい眼差し向けて、よく話を聞いていただきました。独特の語り口も今は懐かしい思い出です。余りにも早くお亡くなりになったときは、長野のお寺で行われたお葬式にも出たことを覚えております。

仲間を大切にされるお人柄で、今となっては知るすべもありませんが、遺稿となってしまいました、故片岡格さんの追悼文のなかにありましたので、それを掲載して先輩を偲びたいと思います。

「私が長野に就職してから、格さんとはしばしば会った。早春の一日、二人で黒姫に登った。たっぷり残雪を踏み、頂上で展望を楽しみながら、両切りのピースを吸った。帰りは信大方式で雪の沢をまっしぐら。小さい滝をずり落ち、飛び降りて。夕方、柏原駅に着いたときは、やっぱりくたびれた。59年の晩秋だったが、小原武君が来て三人で善光寺裏の物見岩へ。格さんが教育学部から大ナベを持ち出してきた。ちょっと登り、アップザイレンした後は肉ナベ。こうした格さんとの交流は、会社勤め駆け出しで、気を張り詰めていた私にとって、本当に気が休まり、心の和むひと時であった。」(中略)

「格さんが卒業して、東京へ行くとき、アパートを訪ねてくれた。何を話したか忘れてしまったが、帰る際、角を曲がる格さんの後姿が妙に脳裡に焼きついている。彼が長野を離れることに対して、こみあげてくる惜別の情を禁じえなかった」(中略)

「人生を愛し、山を愛し続けた君の周辺には“山の気”が漂っていた。君に接すると匂ってきたのだ。……焚き火の香りが、山の朝の空気の冷気が、シュラフザックの汗の臭いが……。

それは僕にとってはまさに青春であった。君は友としてかけがえのない存在だった。

「いつの日か西域へ行こう」「いいですね。行きまっしょ」……二割冗談、八割本気で君と話していたではないか。君と一緒に天山・崑崙を仰ぎ、タクラマカンの夕日を見たかった。アラヨ！ 格さん！」



●中又白谷の滝の下で (右から4番目が窪田さん)



●中又白谷の途中で (左端が窪田さん)

齊田坦男さんを偲ぶ

山田和彦

京都出身のヤスは、その京都弁でいつも周囲をなごませていました。当時、山岳部では京都弁がずいぶんはやったものです。おっとりした性格は山できびしい状況のときでもあせることなく、暴走気味の私をいつもやわらかく止めてくれました。奥又白四峯松高ルートに登ったときでも、私は松高テラスからルートをまちがえて行きつまってしまったが、齊田君に「まあ、一服せいや」と京都弁でいわれて冷静さをとりもどすことができました。

卒業してからは医師としての仕事一本でがんばっていましたが、若くして病気に倒れてしまいました。

彼は「もし鳥になれば今すぐヒマラヤに飛んでいくのに」と言っていたことが思いだされます。ヒマラヤの麓で彼の大好きな酒を酌みあわしたかった！



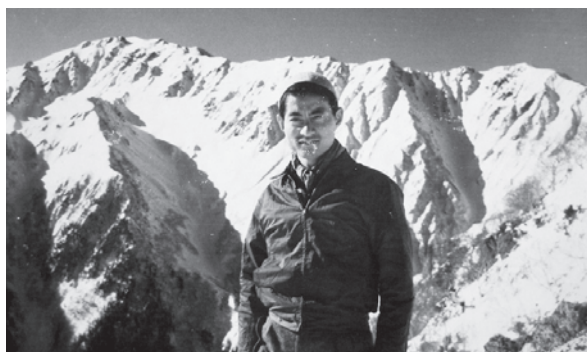
●昭和36年夏山合宿、笠ヶ岳頂上にて、右から2番目が齊田さん。



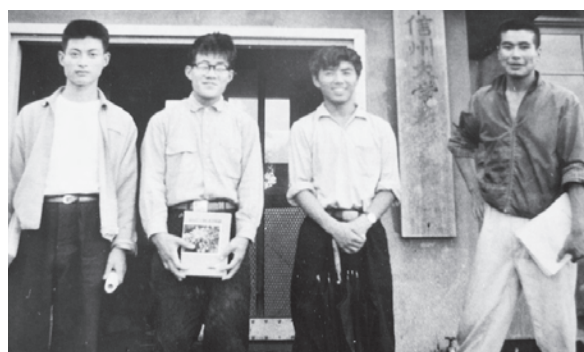
●前穂Aフェース第二テラスにて（左から2番目が齊田さん）

小川永行さんの思い出

奥 嶋 啓 志



● 卒業後北岳を背にした故小川さん



● S36 伊那山岳部室前（左から故小川・奥嶋・新・出島）

'94（平成6年）年末に近いある日電話があった。故・小川永行君から。

来年5月の連休にヒマラヤと一緒にいこうよ！信大応援団トレッキングを募集している。

当時、小生は子会社に出向転籍し清算人として会社整理を命じられ悪戦苦闘中であった。

返事をぐずぐずしていると、矢の電話攻勢。

従業員全員解雇について組合と妥結し、ほぼ就職斡旋に目処がつき、'95年3月末で全従業員解雇、その年の9月末会社整理が決定したのを機会に同道する旨、彼に伝えた。

正月を迎える前であったと記憶している。

その後、'95年2月の初めに3月富士山に訓練を兼ねて登ろう！の誘い。さすがに此のときは会社の状況から気分が乗らずキッパリと断った。これが、小生にとって未だに心残りになるとは、その時は夢にも



● S37.10 白馬冬山偵察



● カオマピーク供養場所

思わず。生涯忘れることの出来ない日となった。

3月30日早朝、奥様より電話。「昨夜、主人が亡くなりました」

故小川君の奥様談

「4月1日付け埼玉県庁より出先へ転勤辞令が出て、赴任前の最後の仕事に秩父へ出張、その帰りに国立競技場にて浦和レッズの試合を見て帰る。と言い残し朝6時5分バイクで南浦和に向かった。このとき交わした言葉が最後となった。

当日、浦和レッズは延長戦で敗れ、時間も遅くなり、小雨の中を単車で帰宅途中歩道の縁石に乗り上げ頭を損傷し病院に運ばれた。意識を回復することも無く亡くなった。

平成6年3月29日23時30分（脳挫傷）享年53歳であった。

本人は目が悪く、小雨がふり、しかも大のファンチームが敗戦、朝早くの出勤による疲れ等の悪条件が重なり事故を起こしたと思います。運動神経抜群の彼が交通事故で亡くなるとは信じられないが「現実ですよ」ね!!!

皮肉にも、亡くなった翌日、ヒマラヤトレッキングのためのビザが郵送された。本人は張り切り、楽しみにしていたのに、残念なことでした。」

彼の遺骨をヒマラヤに散骨するため、奥さんと一緒に遺骨を粉碎した事が昨日のように悲しい思い出として思い出されます。

我々は、平成6年4月26日 羽田空港から関西空港乗り継ぎカトマンズ空港へ彼の遺骨を抱き降り立った。

5月1日現地時間9:00、カオマピークにケルンを積み遺骨を埋葬し、ラマ教の坊さん（同道のシェルパの一人）による供養をおこなった。

*カオマピーク：故片岡、故小川、故牧さんのそれぞれの頭文字を取り、我々がベースキャンプとした Kyanging Gompan にあるピーク（約2時間の行程）に命名した。

命名者は日本からの参加者19名、シェルパ9名、ポーター40名、コック11名、総勢79名。

彼、故小川君は私の良き友人であったが、山、スキーの大先生でもあった。

昭和35年現役入学及び4年で卒業の山岳部で希少な人材（優秀かどうかは別）として、私を大いに可愛がってくれた。

昭和42年、私は卒業後鹿児島島の赴任先から東京に転勤となり、同年8月久しぶりに山に入った。会社の同僚を2名連れ、サマテンから岳沢から奥穂へ。ここから私は現役の奥又白合宿を見学の為1人別れ、A沢を下ることにした。

このとき、分岐点の発見に手間取り、又下りにビビッた。昔はピッケル1本でスイスイ下った記憶と全



● S42.8A 沢



● S42.8 奥又白



● S48.8 上高地帝国ホテル前
日野ルノー車内に故片岡・葛西両先輩・
撮影者板谷)



● S42 奥又白

く異なり、わが足が出ない。大きなステップを切り一步一步下り脂汗を出しながら合宿中のテントに潜り込んだ。いかに山を怠けていたか思い知らされた山行でした。

これに発奮し、北岳に1～2月毎にmy car (3万円) 購入し出かけ始めた。この当時故小川君は谷川岳によく単独で出かけていた。

卒業後の初めての北岳は、土曜日仕事を終え(当時土曜日は半ドン)夜叉人峠に向かった(高速道無し)。22時ごろ到着したと記憶する。

当時、スーパー林道はまだ未開通であった。車の乗り入れは出来なく、少しでも稼ごうとヘッドランプを頼りに初めての未開通の林道を歩き始めた。0時を過ぎても水場が無く飯が炊けない。

仕方なく、眠いし、空腹には勝てず、飯を炊くことにした。唯一の嗜好品ウイスキーを水代わりにして米を洗わずに炊いた。思いのほかうまく炊け空腹を満たすことが出来た。

腹を満たし、たばこを一服したが一杯の酒が無い、お酒の無い夜に、頭にきて寝付かれない。これが最初の北岳、忘れることが出来ない山行となった。

ある日、此のことを彼に愚痴ると、今後お互いに単独行は止め一緒に行こう!と話が纏まった。

その後は彼からスキーの出来ない私に、彼がスキーに行くときは常に誘いがあった。また、私も一度も断ることなく同行しスキー技術を教わった。

このことがきっかけで、格さん、葛西さん、松尾さん、板谷さん、故・牧さん達との山、スキーを楽しむことが出来るようになった。

ある面で、私の人生そのものが故小川さんであった。

合掌

幸田友三君の思い出

駒井 浩



●右側が幸田友三さん

新人合宿のとき、意地の張り合いから梓川の水に手をつけてどちらが長く頑張れるか競い合ったことがあったね。

審判は上級生でしたが、それこそ「水入り」で、「引き分け」といわれて同時に水から手を抜いたっけ。確か、3分ぐらいで手の感覚がなくなっていたね。

君は良く歌っていたね。「ユキちゃんの肌にそーっと 耳を当てればー……」

君と僕は、同じ関西の出身だったこと、同じ工学部だったこともあって、よく一緒に行動したね。

うちのお袋など、今でも君が怪我で入院していた尼崎の病院までお見舞いに行ったときのことを話しています。

君が卒業してからは、それぞれ別の道を歩み、時々消息を聞くだけだったけれど、8年前「信稜」の出版記念会で会ったときは、それこそ31年という時間を忘れていろんな話をしたね。

それから6年後、A先輩のお葬式で会ったときも元気そうだったので、まさかその年の暮れに君が逝ってしまうなんて……。

僕はこれからも山に登ります。

時々君の事を思い出しながら……。

福原正昭君の思い出

松尾武久



●ハツ岳 大同心ルンゼの登攀を終えて

福原君は、天理市の出身であった。高校時代は柔道部に在籍していたと聞いている。従って、足腰は強いほうであったと思う。38年度は、新人が7名入部して、前年度から大幅な少人数になった。大切に育てねばならないと思わせる学年だった。しかし、最終的には彼を入れて3名しか残らなかった。彼は「ムーヤン」と呼ばれていた。名前から着いた愛称ではなく、今思い出してみると、いつの合宿かは忘れたが、彼が「自分は純情無垢で育ちました」という自己紹介をしたことがあった。「無垢（ムク）を（ムタク）」と間違っって言ってしまい、それ以来「ムーヤン」となったと記憶している。

38年度の春山合宿は、明神岳5峰南西尾根から、明神岳を経て、前穂、奥穂、西穂まで縦走する計画で入山した。岳沢の林の中にBCを設営して、前明神沢を詰めることにしていたが、前日の積雪もあり、雪崩が怖いので、沢の左岸の小尾根を一気に、安全なところまで、登ることにして、90分ノンストップでラッセルを繰り返して、直登した。

福原君ももちろん、新人として、足腰の強さを発揮して、その尾根を登った。彼の名誉のため、敢えて細かいことは説明しないが、90分の長さが生理的な限界があったのだろう。

その尾根の名前を、「ムタク尾根」と名前を着けたように記憶している。

彼とは、39年の秋に、初めてザイルを組み、八ヶ岳の大同心に登った。2年生になっており、バランスよく、二人で尺取で登ったように覚えている。写真はそのときの、登攀終了地点で取った写真である。

彼の人柄が良く出ている遺稿が出てきたので、それをここに掲載する。私がリーダーを終えるときに、各係りにも反省文を書かせたが、彼は新人係をやっていたので、彼も反省文を書いている。39年は、38年よりさらに少ない3名の新人であったが、彼なりに考えた新人係を全うしていたことが良く分かる。

新人係の反省

福原正昭

私は個人の尊重と自主の方針で一年生と接した。この方針はともすれば進歩は遅れると思いましたが、これで進歩したのが本当の進歩だと確信したからです。また、部の伝統であるこのことを一年生にも理解

してもらいたかったからです。それ故、欠陥や怠慢は気づき次第指摘しましたが、それも余りやかましく言わず、本人の自覚を待ち、あるいはその機会を与えました。しかし、この態度でやっていくと、一面消極的に見え、また一年生としても余り指摘されずで、困ったことや迷ったことがあったと思います。

それで、私が見た一年生の今までは、私の恐れていた面が現れ、

- ①活動に消極的であった。
- ②一年生の相互の協調性が欠けている。

しかし、これらの欠点は、上級部員の種々のご指導で秋山以来徐々に良くなってきていると思われま。す。(これらの欠点に反して、一年生の人達は現代人に欠けているユニークなところがあり、嬉しく思います)前半期に、これらの欠点が現れたという原因は、私のいたらぬ点、またそれに加え、三名という少人数ゆえに、合宿時に同じ係につかなかったということが原因だと思われま。す。この点、深く反省しております。次年度は、今年度の個人の尊重と自主の方針を修正したものと、合宿時になるべく同じ係にする、あるいは協同研究をさすということまた新人係の人選を厳しくするというをやれば、次年度の一年生はもっと満足できるものとなると思われま。す。

福原正昭君の思い出

宇都宮昭義

当時の教養課程は松本か長野かのどちらかを選ぶことができ、松本を選んだ私は伊那・松本山岳部に入部しました。オリエンテーリング時には階段教室一杯居た入部希望者も新人合宿に参加したのは福原・奈良・中村・牧島・桑原・鈴木嬢・私の7人、冬山では3人となり不作の38年組と先輩を嘆かせました。逆に先輩5・6人掛りで新人一人の指導でしたから山にどっぷりと浸かれ新人にとっては恵まれた年でした。お互い走るのが得意で無いから福原とは馬が合ったのか、体力造りの千鹿頭ランニングの帰りに薄川の桜並木の下でいろいろ語り合い、夜は福原下宿先の緑ノ館か思誠寮で私の部屋かが二人の寝処でした。

専門課程に進級し長野へ行くと伊那松本山岳部から離れて長野山岳部に所属するのが当時のルールでした。冬山合宿から下山した時に宮崎先輩から「来年は長野山岳部だよ、先輩達は皆そうしてきたし例外は認めないよ」と前もって釘を刺されショゲ返っている私に「俺も付き合うから、進級しないで松本に残ろうぜ」と慰めてくれたのが福原でした。緑ノ館で連日連夜の作戦会議、「どの科目を落とせば、授業は週一日で来年楽して進級できるか。揃って効果的に山登り(遊び)する為には授業日は何曜日にするか」二人で無い知恵を絞り火曜日の試験をパスして春山合宿へ参加しました。合宿で明神ムタク尾根を命名して「ムーちゃん」の愛称を得た福原と共にキスリングを担いだまま教務課へ確認に行き「二名共無事落第」を聞いて「ヤッター」と歓声をあげて「親不孝者」と教官から怒鳴りつけられたのも懐かしい思い出です。

殆んど授業が無い上級生を持った井上・牧・向後・菅家カルテットはえらい迷惑だったと思いますが、晴れて留年の二人はハッスルして一層部活動と山にのめり込みました。

「エッセンの福原」の名が定着したのはその年で、暇さえあれば丸正パン店に行き朝から晩まで合宿パンの試作でレーズン・落花生・チーズパンを焼いて居たこと。サマテン村長さんとして設営から撤収まで一夏常駐をし、私達がパトロールで集めた雑多な食材を上手に料理して多いときには50人以上のお客さ

ん相手に三食を賄い、淑徳や学習院の先生・生徒達から「ムーちゃん？味」で絶大な評価を得た時からです。調子に乗って正月に東京へデートをしに出かけ、真冬に2人の薄汚れたショートパンツ姿に驚いたのか待合させた新宿駅で即解散した後日談がありますが。

歳下の生意気な弟と感じてくれたのか、伊那松本と長野とに別れた後も色々相談に乗ってくれました、特に41年の合同新人合宿でそんな事情で伊那松本と長野の事情に精通しているからリーダー、となった時に山の中だけではなく準備会から反省会迄本当にお世話になりました。

卒業して私は東北・福原は故郷の天理と住み盆のサマ天で逢うことも無く、共に歩いた年月の八倍もの月日が流れてしまいました。

牧 晃一君の思い出

寺田 雅 治

私と牧君は、在学時代を共に過ごした時は無かったのですが、私が卒業後松本の百瀬のおじさんの天婦羅屋で西郡君と一杯やっていた時、丁度牧君他3名程の現役の部員達と出会い、西郡君より紹介されたのが彼との最初の出会いです。

彼は卒業後東南アジアで木材関係の海外勤務で頑張っていたのですが、会社の事情等で帰国しその後彼の父上の居住されていた京都の相国寺領の自宅で父上と一緒に生活されていたので、度々拙宅を訪ねてくれ、山の話や海外での仕事の話聞かせてくれました。

ある時、京都近郊の比叡山にあった人工スキー場で、私共夫婦でスキーを楽しんでいた時オールスタイルでザックを担いで滑っている牧君に出会い、私達も同様のスタイルで滑っていたので、三人で大笑いをしたのを思い出します。



丁度その頃より彼の父上が病に倒れられ、長期間彼が一人で看病を続け、献身的な看護の日々を過ごされてきましたが父上はご逝去されました。

その後彼は人生の区切りとして、西国三十三か寺を廻って父上の菩提を弔われました。

しかし、その後の社会復帰に色々と悩みの日々が続き、山岳部時代の友人達も心配してくれ、皆さんの色々な心遣いに励まされ、彼も大変喜んでいました。

そんな中で国土防災技術株式会社勤務の御子柴君が、京阪奈の学研都市の着工前の自然林の植生調査の仕事を彼に紹介してくれ、彼も水を得た魚のように張り切っておりました。

しかし長期間のブランクのため、一番必要な樹木の名前を大半忘れてしまっており、これは大変と、彼より少し得意だった私と二人で京都の北山にある棧敷ヶ岳へ樹木実習登山に出掛け、図鑑片手に二人で登ったのが、唯一の彼との山行になってしまいました。

その後、私の会社で仕事に共に励んでいたのですが、突然の脳出血により若くしてご逝去されました。

先日懐かしいメンバーとの徳本峠への山行の時、牧君の話が出て、現役時代合宿の初日彼がザックを背負うとザックの下から彼の登山靴が少し見えるだけであったとの逸話が出て、小柄で頑張り屋の彼の姿が思い出され大変懐かしい思いをしました。

真面目で、頑固で、努力家だった彼の魂がいつまでも安らかなることを願っております。

牧晃一先輩のこと

武藤 一郎

京都にお父上と住んでおられた牧さんが亡くなって20年くらいになるだろうか。牧先輩は私が1年生の時の3年生である。短躯なれど筋肉質のからだで、特に、大きな荷物をしょって急な坂道を駆け下りる



●乗鞍岳にて



●上野公園にて

韋駄天ぶりから「くだりの牧」の異名をとっていた。話はズれるが、1970年代末期にドークマン・プロの「嗚呼、花の応援団」という破廉恥マンガがあり、私は当時東アフリカの奥地でことのほか愛読していた。そのマンガでは登場人物が急いで走るとき足がグルグル車輪のように回転するように描写されているのだが、これを見るといつも牧さんを思い出した。

あれは確か1年生の秋だった。牧さんがリーダーで、私と同期の田貝（途中で退部）の3人で南アルプスの三峰川支流を詰めて仙丈岳の主稜線の南側に出て、地蔵尾根を下った。最初の日には午後伊那を出て前山を越えて三峰川水系に入り、目指す支流の河原を半ばまで遡行してだいぶ沢も狭くなって来た頃、辺りはだいぶ薄暗くなり始め、さてこの辺で泊まるかとなった。入山前に牧さんは、この山行を「楽しむ登山」と称して荷物はなるべく少なくしてビバーク方式で軽く動こうと言っていた。天気は良好で近づく台風もない。テントもなくフライのみ。エッセン具も最低限だ。夕食の支度を始める前に、牧さんがおもむろに取り出したのは釣り糸で、そこら辺で調達した木切れに結えて沢の小さな滝壺に投げ込むやいなや見る間に岩魚を釣り上げた。なんとまあ、うまいもんだと驚いた。メニューに岩魚の塩焼きを加えた夕食を済ませ、夜空に広がる星を眺めながら三人並んで寝た。将来こんな静かな山懐に小さな山小屋を建てて住めたら、なんと素晴らしいことだろうと見果てぬ夢を追いながら眠りに就いた。

牧さんは卒業すると東京の木場の木材会社に就職した。私が3年生の頃に故郷の名古屋で3年下だった片思いの女性が、高校卒業後と同時に父親から債権者に嫁ぐことを求められて、それから逃げるため密かに東京に出奔した。私は彼女に援助（精神的な）を差し伸べようと、行き先を探した結果なんとか就職先を知ることが出来た。その頃、牧さんは同僚と三人で簡単な流しの付いた下宿に住んでいたが、私はそこに泊めてもらっては彼女と会う算段を練った。木場の出勤は早い。電気炊飯器で炊いたご飯と納豆が毎朝のメニューで、牧さんは突然転がり込んだ後輩にいやな顔一つせず好きなだけ食べさせてくれた。結局、彼女の方は、今から考えればあんな稚拙なやり方で女性に力になろうとしても相手は頼りにするわけもなく、私は傷心を抱いて伊那に戻ったのである。あのときの新宿から乗った夜行列車のシューシューというスチームの音と、外を流れる暗い街の灯を思い出すと、今は亡き牧先輩の心からの親切に改めて頭の下がる思いである。（了）

小川 勝君の急逝を惜しむ

西郡光昭

報告 No.2 を作成中の平成 19 年 1 月 26 日 会社の会議室で倒れ、そのまま帰らぬ人となった。この報告発行に情熱を傾けてくれた 小川 勝君にこの報告 No.2 を捧げます。



●小川山荘でよしゑさんと一緒のひととき



● 40 年度冬山合宿
八方尾根第三ケルンにて
当時は、4 年生でリーダー

去る1月末の君の急逝は非常に残念でなりません。

2月17日に本報告書の校正のための編集会議を持つことを電話で打ち合わせて何日も経たないというのに、会社の会議中に突然倒れ、救急車で病院に運ばれたが治療の甲斐なく不帰の人になったという松尾君からの連絡に呆然としてしまった。

思えば君は信州大学に入学以来、山岳部員として活発な登山活動を続けたが、卒業後もその活躍分野は広がり、海外登山などにも深く係わり大きな足跡を残した岳友だった。

私の在学期間は7年だったが、君も長く在学したこともあって、紆余曲折にとんだ信大山岳会の統合に嫌でも係わらざるを得なかったわけだが、それにしても果たした役割は大変大きなものだった。一方、海外登山に対しても並々ならぬ熱意を示し、1967年にはわが大学で初めてのネパール踏査隊のリーダーをつとめ、信大山岳会の海外登山の先達となってくれた。そして、その後の海外登山、なかんずくネパールでの幾つもの信大登山計画にはほとんどすべて企画段階から大きな力になってくれた。また、自らネパール・トレッキングや西域・チベット旅行を企画し、古いOBやその家族達をも楽しませてくれたことだった。

かといって、これらの仕事は、彼がそれにかかわり易い立場にあったからできたのではなく、ごく一般の会社勤めをしながら果たしたイベントであったからなお更の驚きである。

製飴会社の御曹司だったという君が、何を間違っ^て山岳部に入ったのか、それ以来、すっかり雑^{ごつ}い部員に溶け込んで、育ちの良さと裏腹な生活を通し、リーダーも努めたというのも驚きだ。君と名古屋の高校で同期だった多くの人たちが驚いていたというのも頷ける。

67年のネパール踏査の前、君がこの計画に欠かせない人物なので、ぜひメンバーに加えたい、と母上に許可を貰いに名古屋に行ったときのことを思い出す。あの時、母上は大変驚かれ、ご不満の様子だったが、しばしお話をするうち、根負けしたのか、不承不承お許しを頂戴したのをきっかけに、しばしば泊めてもらっては楽しい時間を過ごさせて貰った。その気持ちの大きい母上^が亡くなられた時も悲しかったが、母上の一周忌を済ませたと聞いて間もなく、今度は君なのかよ?! 世の無情を呪わずにはおられない。

今、まさに本報告書づくりの大詰めの時、この仕事にもまた始めから中枢の一人であった君を失ったことは何とも悲しい。刷り上った報告書No.2のインクの臭いをかきながら頑張ってくれた皆と共に祝杯を上げる場に君がいらないとは、無念この上ない。

我らが誇るバガボンド 小川勝君の御霊 永久に安らかならんことを!

小川 勝さんを偲んで

扇能 清

小川さん今度のOB会に参加されますか、ヒマラヤ実行委員会は、正月の乗鞍スキーは、山哲会は、穂高山荘は、卒業してからもよく連絡をとって、信州行きを重ねてきた。小川さんが行くとなれば楽しくなり、仕事等でだめだとなればがっかりする。

小川さんの実家で、お母さんや節子さんに歓待され、味を占めて、信州の行きや帰りに何度も寄せていただいた。小川さんの面白い話題にも期待して。

大学入学と同時に山岳部に入り、その年は2～3年生が少なく、小川さん達4年生の下で新人期間を過ごすことになった。小川さんの周りに多くの者が集まり、お酒を学び、山の話聞き、そして、本棚にたくさんあったヒマラヤの遠征記を借りて読んだ。

ネパール登山解禁の情報に、西郡さんや小川さん達先輩の熱を帯びたヒマラヤの話に、憧れと羨望の気持ちで聞き入り、とりこになり、自分もヒマラヤを目指すようになった。

二十年程も続いただろうが、正月の乗鞍でのスキーでは、小川夫妻、寺田さん家族、平父子と4～5泊し、8時間のスキー、8時間の睡眠、8時間の食事で延々と放談し飲み続け、岡崎さんから呆れられていた頃が懐かしい。

穂高山荘を建てるにあたっては、身辺を身軽にしておき物を持ちたくないという気持ちから、初めは迷っておられたが建てる決めてからは、早く建て若いうちから楽しもうぜと、後の行動は早かった。

新築に合わせた様に、御子柴君の呼びかけで始まったヒマラヤ登山計画、二つの未踏峰の登山許可を得るにあたって、ネパール側との面倒な交渉は殆ど小川さんの負うところとなった。きっと、昔のことなど想いだし、その交渉を楽しんでおられたに違いない。

山岳会に育てられたから今の自分があると話され、大変な愛着を持って、山岳会が今後も魅力的な会であって欲しいと願っておられた。その為の支援を惜しむことなく、かけがえの無い良き理解者を失ったことに、呆然とし本当に残念に思う。

来る者は拒まず、広い心で、他人に押し付けがましくなく、皆が親しみを感じ、人の輪の中にあった小川さん。

42年と10ヶ月親しくお付き合いしていただき、本当に心からお礼申し上げます。

小川勝氏を偲んで

穂高別荘の鍵番 井関芳郎

私が信州大学に入学し、山岳部に入部したのは昭和42年4月でした。小川さんは6年生部員でした。当時、山岳部員は8年生部員を筆頭に7年生、6年生、5年生部員がぞろぞろおり、普通なら大きな顔が出来る4年生部員が肩身の狭いような感じでした。

その年の夏、小川さん他3人の部員がネパール・ヒマラヤを目指して出発しました。新人であった私達も準備を手伝ったり、余った品物の恩恵にあずかったりした思い出があります。

小川さんはネパール・ヒマラヤ踏査行から帰った翌年7年生で卒業されましたが、この間一緒に山を歩いたことは余り記憶に残っていません。記憶にあるのは当時最高の登山靴と言われたイタリア製のドロミテの登山靴を履いていたことくらいでしょうか。

卒業されて東京の上野にある洋酒の輸入代理店に勤務されました。その頃、小川さんを上野に訪ねたことがありました。洋酒のミニチュア瓶を土産にいただき、そして「剣菱と言う旨い酒がおいてある飲み屋がある。ちょっと飲みに行こう」と近くの居酒屋で一杯ごちそうになりました。しこたま痛飲したのを覚えています。東京育ちの私が上野で飲んだのも「剣菱」を飲んだのも初めてでした。この頃の小川さんは「剣菱」がとてもお気に入りのようでした。

今から二十数年前の夏、ちょうどお盆休みの頃でした。小川さんと扇能さんが穂高の拙宅へ滞在していました。庭で火を炊いて肉を焼き、ビールを飲んでいました。その夜は殊のほか涼しく、寒いくらいでした。暑い大阪、名古屋から来ればそれだけでも安曇野は涼しいのですがこの夜の涼しさは格別でした。そんな時に「こんな涼しいところで暮らしているなんて、お前はけしからん。泥棒……」酒が回って来るといつもこのような調子でしたが、この夜は少し違った展開になって来ました。「この涼しさをお前が独り占めしていることは許さん。私らも別荘を建てて住むことにしよう」と言う結論になったと記憶しています。

私はこの話の半分は冗談と思っていましたが、その後の展開は県内の別荘地巡りと土地探しとなり、結局は小川さんと扇能さんの両家で穂高に土地を購入することとなりました。私達も共に冬の寒い時期にチェーンソーで立木を伐採したり、建前に立ち会ったり、別荘が完成後は鍵番（管理人）を仰せ使う羽目になってしまった次第です。

あの別荘では多くの人々が集い、夢を語り、素晴らしいアイデアが浮かび、そのアイデアが実行に移されました。幾多のヒマラヤ遠征や応援団トレッキングはこの別荘で囲炉裏を囲んで「ヒマラヤへ行こう会」と称して酒を飲みながらの話から発展し、実現したものでした。

小川さん、扇能さんが別荘に滞在される時にはよく食事のお誘いを受け、家内と二人で出かけて行くのが常でした。小川さんはここ数年ワインが非常に気に入りで、その席で私達も良くワインをごちそうになりました。ワインのボトルを2、3本小脇に抱えて来て囲炉裏のまえに座り込み、栓を抜き皆のグラスにワインを注いで下さる時のうれしそうな顔は今でも忘れません。

おいしいワインをいろいろと飲ませていただき有り難うございました。あれから私もワインが好きになってしまいました。

私の許にひとつの鍵があります。小川さんの別荘の鍵です。主を失った鍵は寂しそうです。使ってくれる人を待っているようです。小川さんの思いがいっぱい詰まった別荘です。天気の良い日には雨戸を開けて、風を通しておきましょう。これからもこの別荘を訪れてくれる人のためにも。

これを書いていて悲しさがこみ上げてきてたまりません。何かまとまりのない文章になってしまいましたがお許し下さい。

志半ばにして突然逝ってしまった小川勝さん、心からご冥福をお祈りします。

追悼 信大小川勝隊、コロンボ上陸から 40 年

米倉幸夫



●カトマンズ、ラナさん宅にて、後列右から三人目小川勝さん、前列右に米倉さん

1967年（昭和42年）に信州大学山岳会初めての海外活動であるネパールヒマラヤ踏査隊が8月4日横浜港からフランス郵船の客船ヴェトナム号で多くの師、先輩、同僚、諸兄の支援を受けて出発しました。

香港、マニラ、バンコク、シンガポールと寄港した後ダッカの次カルカッタで下船する予定であったが後に第三次中東戦争と呼ばれることになるイスラエルによるエジプト攻撃、スエズ運河の封鎖が勃発しました。当初スエズ運河経由でマルセイユ行きの本船は急遽ダッカ、カルカッタを抜港してコロンボをアジアの最後に、南アメリカ喜望峰を回って地中海に向かうこととしました。

海外初体験の現役学生4人が緊張と0.5トンの登山・トレッキング用装備食料とともに上陸せざるを得なかったのがコロンボの客船ターミナルでした。この時の7ヶ月の長旅は私のその後40年の人生に大きな影響を与えた出来事でした。

今年の1月9日、仕事でスリランカをたずねたときに訪問先が用意したコロンボのホテルで客船ターミナルが見下ろせる高層階の部屋から見た光景は40年前に私をタイムスリップさせるのに十分過ぎるほどノスタルジックなものでした。翌日は早めに仕事を切り上げさせてもらって棧橋に近づいてみようとしたもののテロ対策の厳重な警戒下におかれ内部に入るのは制止されてしまいました。どこか見覚えのある英国統治時代の建物が残っている港の通りを3輪タクシーに乗って回ったあと、現在は使われなくなってい

た鉄道駅へ。そこで知ったのは40年前にセイロン島北西部からフェリーでインド大陸にわたるために荷物を伴って移動した鉄道路線タレイマナー行きも、インド大陸に渡るフェリーも今では治安悪化から廃止されているという事実だった。

小川勝、望月映洲、佐藤邦彦の3氏との40年前のアドベンチャーの記憶を手繰りながらその晩は最上階のバーで閉店まで一人で港を見下ろしながら飲み続けました。

1月10日のコロンボでの話をお聞かせしないうちに小川勝さんは逝ってしまわれました。 合掌

追悼 小川勝さん

西 阪 孚 (パラグアイより)

先週 月曜日(29/01)春寂寥を通じて小川君の訃報を伺いました。すぐにお悔やみをとコンピューターを開けましたが、涙の方が先になり今日まで延び延びになってしまいました。(今又 涙です)

私達の同期は30人以上が入部、最後まで残ったのが6~7人位かと思います。色々とユニークな人がいましたが、小川君は名古屋の鮎屋さんの育ちの良いボンボンで山仲間として本当に素晴らしい人でした。剣で亡くなった山形君も同じです、良い人・惜まれる人程、早死にされる様で残された我々は……チョット言葉に戸惑います。

小川君は県の森のコンパでしたか当時はやりのヒョッコリ・ヒョータン島の主題歌を浪曲にアレンジして浪々と謡ってくれました、その着想と才能にビックリしました、未だにその時の彼の顔が思い出されます。彼のあだ名はババーッ子でした。吞んでいると何時もバーさんの話が出てきます。機会に恵まれて名古屋のお宅にお邪魔し一泊したその翌朝、彼が玄関で一言<靴>と云うとお婆さんが飛んで出て来られて靴を揃えかがんでひもまで結んで居られました。本当にババーッ子と改めて感心しました。

涙が止まらなくてこれ以上書けません、 ゴメンナサイ……



● 38年冬山 北岳山頂にて板谷・西阪・松尾・小川・柴田